

-Attention-

この本の内容は基本的にほのぼのラブラブ日常系伊奈スレですが、回想シーンにモブレなど過激な描写を含みます（それらを肯定しているわけではありません）。該当シーンは他の部分とあまりに毛色が違いますので、ワンクッションと注意書きを添えてあります。ご自身のご判断で読み進めていただくようお願いします。

午前七時五分。

『出かける前に寄ってくれ』

「？わかった」

『ブッ、ツーツーツー』

朝食と洗い物を終え出勤の支度をしていると、スレインから着信があった。慌てて通話ボタンを押したものの、会話は約三秒。何だろうと思いつつ、伊奈帆は握ったままのネクタイを襟に通して前で結んだ。

ピンポーン。

それから八分後。伊奈帆は集合住宅の自室を出て、隣の部屋のインターホンを人差し指で押した。地球連合軍の社宅にしては長閑で間延びした電子音である。直後、扉の向こうからバタバタと足音が近づいてきた。

ガチャガチャ、カチャ、とロックが解除。向こう側に扉が開き、隙間からスレインがひよっこり顔を出す。顔色は悪くない。寝癖が側頭部についており、ルームウェアは第二ボタンまで開いてい

た。五月とはいえ、こんな薄着で彼は寒くないのだろうか。

「おはよう。調子どう？」

スレインを見ると、反射的に健康状態を確認してしまう。伊奈帆が挨拶をすると、スレインは相変わらずだな、と苦笑しこっくり頷いた。

「見ての通りだ。……ほらこれ」

スレインの腕がずい、と伊奈帆の胸にまっすぐ伸びた。

「え？」

差し出されたのは何かの包み。青と白のストライプ柄の布の結び目がチョコンと上部の、両手に収まる立方体。持った感触はふにやりと柔らかい。

「お弁当？ これ」

おそらく中身はサンドイッチ。逆にこれで中身が全く別のものだったら面白し、スレインの場合はその可能性は無いとも言切れない。そういう突飛も無いことを時々しかすのだ、彼は。

「うん。暇だから作った」

スレインが口を曲げて頷く。良かった。ちゃんとお弁当だ。伊奈帆は包みを上下した。

「ありがとう。嬉しい」

スレインが、僕のために、早起きをしてお弁当を作ってくれた。隣で暮らして、彼の生活や健康状態が見違えたのは知っていたが、まさかこんな事をしてくれるなんて……。食事を摂らない時期が続いた極秘施設での彼の姿を知っているだけに、感激もひとしおである。

「じゃあな」

「うん。行ってきます」

「いつてらっしゃい」

しかも、いつてらっしゃいの挨拶まで。怒ったような表情が気になるが、照れ隠しだろうと結論づける。伊奈帆は至近距離で手を振り、扉が閉まる寸前でその手をぴしゃりとたたかれた。

「あれ。少尉、今日はお弁当ですか？」

「はい」

昼休憩。地球連合軍サイバネティクス研究所オフィスで、伊奈帆は同僚に挨拶を返す。

「いいですね。僕は社食に行ってきますので」

「ごゆっくり」

目の前には、持参した魔法瓶の水筒と持たせてくれた弁当包み。今日は幸いデスクワーク。出張も会議も呼び出しも無い。ざっくり言ううと暇な日だ。ゆっくり向き合う事ができる。この、スレインの手作り弁当に。

「よし」

固結びのランチクロスを前に大きく息を吸って吐く。お隣さんも約三カ月。何度と一緒にご飯を食べているものの、二人の時には基本的に調理は伊奈帆が担当する。だから、スレインの料理の腕は未知数だ。鬼と出るか蛇と出るか、は言い過ぎな上に用法が不適切だけれども。貰った時には喜びが大きすぎて失念していたが、実のところ好奇心と同じくらいの不安を感じる。

……まあ、スレインだって普段の食事は自分で作って食べているはずだ。

姉が気まぐれに作る黒焦げ弁当を長年平らげてきた伊奈帆だ。何が出てきても、完食する自信があった。

「いただきます」

手を合わせ、弁当包みを解く。ランチクロスの結び目が固すぎるので手こずったが、現れたのはサランラップに包まれた正統派のサンドイッチ。食パンを半分にしたサイズのそれは全部で八つ。ハムレタス、チーズ、イチゴジャムとマーマレードがそれぞれ二つずつ。

想像よりも普通で、想像よりも遥かに美味しそう。嬉しい誤算だ。

ちゃんとしてるんだ、ご飯。

じーんとしつつ、伊奈帆はハムレタスを手を持った。サランラップの端を剥がして頬張る。うん。ちゃんと美味しい。パンの表面にマヨネーズではなくて、バターを塗っているところに文化の違いを感じる。味付けは薄め……というか、多分何もしていないだろうが、かえって素材の味がわかる。全部問題なく美味しい。温かいカフェオレが欲しくなった。

ピンポーン。バタバタバタ、ガチャガチャ、ガチャリ。

「あ、おかえり」

扉を開けたスレインが言った。

伊奈帆は定時で退勤し、現在時刻は十九時半。自分の部屋に入るより先に、伊奈帆は隣の号室のインターホンを押したのだった。

「ただいま。朝はお弁当ありがとう」

「僕の分のついでだし、別に……。それを言いにわざわざ？」

ぶつきらぼうな物言いだが、表情は柔らかい。ルームウェアはラウンドネック。スレインは既に風呂を済ませたようで、ほんのりと石鹸の匂いがした。

なんかちよつとドキドキする。……なんでだろう？

「うん。あとこれ」

心の中で首を捻りつつ、伊奈帆はエコバッグを差し出す。スレインは受け取り、中を覗いてくすぐったそうに苦笑した。

「こんなのいいのに」

袋の中には、折りたたんだ弁当包みと、結露で湿った缶ビールが三本。

「僕も飲みたいから。お邪魔していい？」

「ああ。どうぞ」

スレインが半身を向けて左手で促し、伊奈帆は玄関先に足を踏み入れる。さっきの「おかえり」のせいか、一緒に暮らしているような錯覚がして伊奈帆は目を瞬いた。

約一カ月後。

「あ、少尉。今日もお弁当ですか？」

「はい」

伊奈帆は、今日も今日とてデスクにスレイン手製のお弁当を広げていた。同僚が美味しそうですね、と覗き込む。

「近頃、多いですね。節約ですか？それとも丁寧な暮らし？」

伊奈帆が料理を趣味としていることは、色々あつて職場の人間は知っている。しかしこれは自作ではない。誤解を解くため伊奈帆は首を振った。

「いえ、作って持たせてくれるので」

「え」

「ええっ!？」

「なんだってえ!？」

「っ、つつつ、作って!？」

「モタセテクレル!？」

ドミノ倒しを思わせる連鎖反応。キャー、という悲鳴もしくは絶叫がなぜかあちこちから聞こえる。

「愛妻弁当かぁ。隅におけないね、少尉も」

年配の上司がにこにこと言った。

「あ、愛妻弁当っ？」

伊奈帆はガタンと机に手をつき立ち上がる。さっきの上司が腕を組み、頷きながらしみじみ言う。
「いいひとがいたんだねえ。なんだか安心したよ。良かった良かった」

「いいひとって……」

スレインが作ってくれたお弁当をまじまじと見る。弁当箱にきっちり詰められたおかずは、ご飯にウインナー、ブロッコリーと卵焼き。しかも、ウインナーは、目が黒ゴマのタコさん。彩り豊か。赤緑黄の栄養バランスもカンペキ。いつの間にか、めっちゃくちゃ上達している。それだけ頻繁に作ってくれているということか。

「あ、少尉赤くなった……!!」

「じゃあ、本当に……!!」

わーっ、と歓声、そして拍手に包まれるオフィス。伊奈帆は混乱しつつ、平静を装い口元を手で覆う。

とてつもなく恥ずかしいけど、ちょっと嬉しい。

ん？嬉しい？……ってことは。

もしかして……。

僕、スレインのこと好きなのか？

「わー！ おめでとうございます！」

「おめでとう……！」

「おめでとさん！」

耳まで赤くし俯く伊奈帆に、職場一同から一層大きな拍手が送られた。

2021/05/20

-2021/06/21

まえがき

この本の設定は、ざっくり言うと「伊奈スレが古民家カフェでスローライフするほのぼの日常系」です。前に出した「オーダーメイド」と同設定の補完本(時系列としては開店前の話が多め過去話含む)となります。前巻のあらすじは以下の通りです。

「オーダーメイド」あらすじ

二〇二四年四月一日。軍を退役した伊奈帆は、同居していたスレインと共に交通機関のインフラが未発達な山奥の一軒家に移住した。古民家カフェをやりたい、という伊奈帆の希望から、平屋の家屋を一部リフォーム。中庭を手入れし店内を整え、二人きりでの田舎暮らしも軌道に乗った七月五日、古民家カフェ「喫茶海猫」は営業初日を迎えたのだった。

目次

まえがき	13
二〇二四年四月四日	16
二〇二四年四月十四日	29
二〇二四年五月六日	39
[2021.02.04]	50
二〇二四年六月六日	60
二〇二四年六月十八日	70
二〇二四年六月二十六日	86
[2023.12.23]	102
二〇二四年八月十一日	130
あとがき	176

Here we are

二〇二四年四月四日

「お花見しようよ」

朝食の席で伊奈帆が出し抜けに言った。彼の会話には、脈絡というものが欠如している、と、スレインはかつて何度もあったことを再確認し味噌汁を啜る。

「オハナミって？」

伊奈帆はよしきた、とばかりに機敏に頷き口を開く。

「日本の春の伝統行事。桜を鑑賞する目的で寄り合い、お弁当を食べてどんちゃん騒ぎ」

「ドンちゃん？ 誰だ？」

「ワイワイ騒ぐってこと」

「ワイワイ騒ぐ？ どうやって？」

「カラオケとか」

「するのか？ カラオケ」

「いや、しないけど」

伊奈帆は鮭をほぐして口に運ぶ。次に白米。そして味噌汁。初めて見た時には驚き、器用な食べ方だな、と言ったら、三角食べって知らない？と彼の方が驚いていた。

「お花見弁当を囲んで、呑んで食べての宴会が主目的」

「ああ。なるほど」

「これを、花より団子という」

「……ふうん？」

「明日は雨らしいし。中庭の桜、散る前にさ」

伊奈帆は、ごちそうさま、と手を合わせる。

「お花見弁当広げて、昼からどんちゃん騒ぎしよう」

「だからその、ドンちゃんってのは誰なんだ？」

「……君はショッピングモール行って、飲み物買ってきて」

僕はお弁当作るから、と言う伊奈帆に、スレインは頷く。

「ビールやワインだけじゃなくて、チューハイとかもお願い。甘いめの。あとデザートも。アイスがいいな」

「注文が多いな……」

白いご飯の最後の一口を放り込み、囓んで飲み込む。箸を置いて、スレインはふと聞いた。
「どんな弁当、作るんだ？」

伊奈帆は僕を上目遣いでじつと見て、やがてニッと笑みを浮かべる。

「それは、開けてからのお楽しみ」

それがお弁当の醍醐味。そう付け加え、おぼんに食器を重ね出す。

大型ショッピングモールの食料品売り場は、家族連れでごった返していた。ああ、休日か、とスレインは気づく。カートは……。邪魔になるか。カゴだけ持って商品棚に向かうことにする。

「えっと、まずはお酒を……」

時刻は午前十時を過ぎたところ。家までは車で片道二十分かかるから、帰ったら昼に近い。すぐに飲めるよう、既に冷えている冷蔵コーナーへと向かう。スレインはとりあえず六本パックの缶ビールを買い物カゴに入れた。

「甘いやつか……」

ビールの隣に、種々多様なチューハイが並んでいる。柑橘系の種類が豊富だ。

「あ、これなんか甘そうだ」

文字の書体が丸みを帯びた、パステルカラーのチューハイ缶を見つけた。可愛いイラスト入りで、種類はイチゴやピーチ、カルピスなんているものもある。パッケージの女子力はともかく、果汁の割合も多いし、伊奈帆が好きそうな感じがする。苦味がなくて、ジュースみたいな甘ったるい感じ。四本ほど選び、棚を回り赤白のワインを一本ずつ。花見は日本の行事であることから日本酒も入れて、次は冷凍コーナーへ。

「アイスは……」

どれがいいかな、と冷凍棚の前で思案していると、隣の冷凍ドアがパカッと開いた。

「あなた、いつもそれねえ」

「だって、好きなんだもん！」

母娘が箱アイスを手に談笑していた。パッケージにプリントされているのは、夏の果実を模した棒アイス。

「この、種がおいしいの！」

「お腹から芽が生えるわよ」

「本物じゃないもん、チヨコだもん！」

微笑ましい光景をスレインが眺めていると、少女とぱちつと目が合った。オーバーオールにポニーテールの、八歳くらいの女の子だ。

「こんにちは」

おはよう、のほうが良かったかな。言った後で思いながら、スレインは少女に微笑みかけた。

「~~~~~！」

なぜか少女は声にならない声を上げ、母親の後ろに隠れてしまった。

「あ、ごめんなさい。急に話しかけたりして……。怯えさせるつもりは」
少女の反応に若干ショックを受けつつ、母親に頭を下げる。

「エ!? あ、いえ!? オキニナサラズ……!!!」

両手を最速モードのワイパーのように左右に往復させ、母親はああ、私何言ってるの!? と混乱している。

「あ……。すみません。僕、すぐ退散しますので」

ガラス戸から、少女の手にしたものと同じアイスを選んでカゴに入れた。

「じゃあ、僕はこれで」

この数年で随分丸くなったと自分では思っていたけれど、僕って怖いのかな。昔っから目つきも悪いし……。そんなことを考えつつ、スレインはとぼとぼとレジに向かった。

「？ あ、鳴ってる」

レジの順番待ちで端末から電子音。マナーモードにするのを忘れていた。周囲の人がチラチラ見ている。慌てて通話ボタンを押す。

「はい」

『買い物終わった？』

「今、レジに並んでる」

『セーフ。あのさ、卵とレタス買ってきて』

「ええ？ 今から戻って？」

『全部使っちゃって、明日の分が無くなったんだ。頼むよ』

「しょうがないな」

『じゃあ、よろしく』

端末をポケットに差し込み、スレインは列から離れ、生鮮食品のエリアに向けて方向転換した。

家用車のステーションワゴンで山道を上り帰宅。納屋の前に駐車し、スレインはパンパンのエコバッグを両手に下げて、勝手口から中に入る。古い台所の床は靴のまま入れるので、こういう時に楽でいい。

「おかえり、スレイン」

「ただいま。ほら、これ」

ドリンク類を詰め込んだ緑のバッグをテーブルに一時置きし、流しの前にいる伊奈帆に、食料品が入った青い方のバッグを差し出す。

「あ、牛乳と食パン。ストック無かったんだ。ありがとう」

「ついでだから」

テーブルすぐのコンクリ床に、クーラーボックスが用意してあった。スレインが膝をついて蓋を開けると、既に保冷剤が詰め込まれていてひんやりしている。準備がいいなと感心しつつ、スレインはガコンガコンと缶の酒を入れていく。最中、冷蔵庫が開くパッキンの音がした。伊奈帆が食材を仕舞っているのだ。

「お弁当、できてるよ」

クーラーボックスの蓋を閉めたタイミングで伊奈帆が言った。スレインは立ち上がり、彼の視線が示す方に顔を向ける。台所から一続きの、居間のちゃぶ台。そこに紫色の風呂敷包みが置いてある。スレインはわあ、と思わず声を上げた。

「懐かしいな、これ」

「でしょ？」

このランチボックスは確か、ジュウバコとかいうやつだ。三段になっていて、積み重ねる事ができる日本の弁当箱。スレインは面会室で、何度も見た事があった。伊奈帆が何かと作って持ち込んでいたのだ。確か中身は、おにぎり。サンドイッチ。卵焼き。チョコチップクッキーや、シュークリームなんかもあったな。

伊奈帆がクーラーボックスを肩にかけた。そのまま居間へ段差を上げる。

「縁側に移動しよう」

「わかった」

スレインは重箱を両手で持ち上げ、伊奈帆の後に続いた。

「はい、乾杯」

「乾杯」

カツン、とアルミがぶつかる音。居間からすぐの縁側に足を下ろし、クーラーボックスを背後、お重を間に並んで乾杯。一杯目のドリンクは、スレインはビール。伊奈帆はピンクと青で配色された「苺さくらんぼ」という赤い文字が踊るチューハイ缶。半分くらいまで飲んで、缶から口を離し、桜を見上げる。見慣れた小振りの桜の木も、縁側に座ると大きく見えるものだな。青空に広がる細い枝。重なる花に若葉が覗く。薄紅の花びらがはらはらと雪のように落ちる様に、スレインは少し見惚れた。

「お弁当にしようよ。スレイン、開けてみて」

伊奈帆の言葉に、スレインは風呂敷の結び目を解く。柔らかな薄い布地ははらりと広がり、伝統工芸っぽい模様の、三段重ねの重箱が現れた。伝統工芸「っぽい」というのは、この重箱はプラスチックの安価品であると聞いて知っているからだ。

何かな、とワクワクしながらスレインは蓋を持ち上げる。一の重を開くと、対角線で並んだまんなかいパンが目に見え込んだ。

「わ、ハンバーガーだ」

「びっくりした？」

スレインの高い声に、伊奈帆は満足そうな表情で缶を少し傾ける。

「おにぎりとか、お寿司なんかかと」

まさか、重箱にハンバーガーとは。

てかりのある丸いバンズからはみ出るレタスと、薄く焼いたハンバーグ。デミグラスソースの香ばしい匂いが広がる。半透明のクッキングシートに半分ずつ包まれて、パステルカラーの爪楊枝が刺さっていた。こんなかわいいの、どこにあったんだろう。なかなか手が込んでいる。

「気楽でいいでしょ？」

「うん」

僕に合わせてくれたのかな、と伊奈帆の気遣いを感じつつ、続いて二の重を開く。やはりというか、フライドポテトが山盛りだった。それに、唐揚げとミニトマト。じゃあ三の重はなんだろう、フィッシュフライとかだろうか、と予想しつつスレインは二の重を持ち上げる。

「……え？」

一面の黄色。いや、端っこにきゆうりとか、ちょこつと詰まっているけれど。

「うわ、これ……。全部？」

「好きだから」

三の重にみっちり詰まった卵焼き。こいつ、本当に卵が好きだな。

「これだけ作れば、卵も無くなるな……」

「お花見となると、ついテンション上がっちゃって。ちよっと作りすぎたかな」

「……ちよっと？」

「これさ、種類があるんだ。説明するね」

伊奈帆が整然と並ぶ卵焼きに指を伸ばす。

「これは出汁巻き、こっちは海苔、これはカニカマ。これはチーズ」

言われて見ると、列ごとに具が違う。

「すごいな」

「でしょ？」

どれにする？ と聞かれ、スレインは一番右端に箸を伸ばす。

「じゃあ、この、チーズにする」

「僕は海苔にしようかな」

ハンバーガーにポテトに卵。作ったばかりでまだ温かく、少し濃い目の味付けは冷えたビールに

よく合った。

中庭の桜は、既にいくつも葉が出ている。緑色と淡いピンクの重なりは気取ってなくて気持ちぐ和む。花卉は、舞い落ちるという形容がぴったりなくらい、絶え間なく降り落ちてくる。料理に花卉がいくつも舞い落ち、それも楽しい。

「気持ちいいなあ」

自家製ハンバーガーを平らげて、伊奈帆が言った。縁側の床に後ろ手をつき、リラックスした姿勢で空を見上げている。

「外で食べると、美味しく感じる」

「だよ。自分の家でもさ」

自分の家。それが僕にも当てはまるのが、なんだか少し気恥ずかしい。

「スレイン？ どうかした？」

「なんでもない」

照れ臭くて、ビールを煽る。炭酸が鼻から抜けて、喉の奥が熱くなった。鼻の頭に桜が落ちる。指で抓んで裏表を見る。

「ねえ、こっち向いて」

「……なんだ？」

チュツ。

「あ、苦」

目を瞑る暇もなく、顔が近づいて離れていくのをぼうっと見送ってしまった。

「ばか、いきなりなんだ」

「うわっ！」

我に返って肩をどつくと、伊奈帆は横向きに倒れた。いてて、と全然痛くなさそうな声で言っ
てこちらを見上げる。

「だって、かわいい顔してたから」

伊奈帆は寝転がったまま仰向けになり、両腕を頭の後ろで組んだ。

「お花見、楽しいね。来年もやろう」

伊奈帆は腕を枕に大きな欠伸を一つする。

「そうだな」

その顔を見下ろしてから桜を見上げ、スレインはミニトマトを頬張った。

二〇二四年四月十四日

ポーン、と暢気な電子音。伊奈帆は電光パネルを見る。表示されたナンバーは17。手元の印字と同一だ。カウンターに向かう。事務服の職員がぺこりと会釈をしたので、伊奈帆もそれに倣った。

「こちらへどうぞ。番号を確認しますね。……はい、確かに。どのようなご用件でしょうか？」

町役場である。転居の手続きに来たのだ。とはいっても、軍関係の諸々、特にスレインの戸籍を含めた今後の書類を待たされている状況なので、今日できるのは伊奈帆の住民登録だけ。スレインの処遇は最高機密の惑星間問題とはいえ、こんな宙ぶらりんの状態がいつまで続くのか、とうんざりする。

「引越しをしたので、転入届を」

「書類はご記入済みですか？」

「はい。これです」

用意してきた書類を重ね、アクリルパネル下部の隙間から向こう側へと差し入れた。オレンジ色の指サックが書類名の部分を確認するように捲っていく。

「……はい。少々お待ちください」

伊奈帆は頷き、背後のソファに腰掛ける。ロビーに居るのは伊奈帆を含めて四人ほど。人の少ない小さな町だが、役場は新しく清潔だった。明るい木材の壁、バステルカラーの椅子やソファ、中の液体がくるくる回って光りを放つ空気清浄機。陽射しがブラインドから射し込み、小綺麗で洒落た雰囲気だ。近代的な内装に、流している音楽だけがやけに古めかしい。歌謡曲というジャンルだろうか。

しかし、結構待たされる。こういうところは、俗に言うお役所仕事なのだ。それは軍も変わらない、と伊奈帆にしては珍しい方向に思考が遊ぶ。

「あの、界塚さん？」

声を掛けられ驚いた。人の気配を察知してはいたが、声をかけられるとは思わなかった。

そこに立っていたのはこざっぱりとした風貌の、三〇代らしいスーツ姿の男性だ。軍関係者かと緊張したが、身のこなしは間違いなく一般人。

「僕は貴方と、どこかでお会いしたことありましたか？」

「初対面です。が、私は貴方を知っています」

「どういうことですか？」

男はにこやかな表情で胸に片手を当てた。

「あの家の、元の持ち主の血縁者です。私が取引の担当者でした」

「そうだったんですか」

やり取りは数年前の事だが、伊奈帆は名前を記憶している。レスポンスが早く、とんとん拍子に購入に至った。あれはこの人だったのか。

彼は片手を遊ばせ、重心を変えた。身体に合ったスーツやスマートな所作を見るに、都会で暮らしたことがあるのだろう。

「気掛かりだったんです。家を買われたのに、全然おいでにならないから」

「色々とありまして。でも、どうして僕が界塚伊奈帆だとわかったんですか？」

片目を細め、彼は笑った。悪戯を企む少年のような表情に見える。

「界塚さん、都会の人ですね」

「？」

「田舎の情報ネットワークはすごいですよ。引越したんか、十分後には町中に知れ渡ります」

「え？」

「ははっ、半分くらいは冗談です。でもそのくらい、都会とは娯楽の質が違うんですよ」

娯楽、という言葉に伊奈帆は眉根を寄せる。男はそれに気づいたようで、視線を一度上に向けた。

「界塚さん、一人暮らし？」

「……実は、連れがいて」

あることないこと言われるのも困るが、真実を追求されるのが一番まずい。娯楽という表現から察するに、余所者意識が強そうな閉鎖的な日本の僻地。スレインの容姿は、このような土地では際立って目立つだろう。戦時中の海賊放送は、調べればいくらでも出てくる。荒い画質だが、それと違って見ればわかってしまう。どうやってこの問題を解決すれば……。

変装とか、した方がいいのだろうか。そういうことが嫌だから、都会を離れここへ来たのに。考え込む伊奈帆を見つめ、男は顎を引いて口を開く。

「なるほど。訳あり？」

「そんなところです」

伊奈帆が頷くと、彼は真面目な表情で右手のひらを上に向けた。

「事情を聞かせてくれますか？ 悪いようにはしません」

伊奈帆は厳しい視線を送る。彼は怯まず、首を左右に小さく振った。

「他意はそれほどありません」

彼は胸ポケットからアルミ製のカードケースを出し、名刺を取り出しケースに乗せて伊奈帆に差し出す。両手で受け取り、表面に素早く目を走らせる。この町のシンボルマーク、マスコットキャラクターとともに、「町長」という役職と彼の名が大きく印字されていた。

「私、この町の町長です。せっかく若い人が来てくれたんです。長く住んでもらいたい」

多少無理を通したにせよ、正規の手続きの退役と釈放だ。僕らに対してこんな手の込んだことをする相手も理由もないか、と伊奈帆は少しだけ警戒を解く。隠し通すより事情を伝えた方が後々のことを考えるといいかもしれない。少しでも長くこの場所で暮らすためには。

ポーン、とチャイム。界塚さん、と名を呼ばれた。伊奈帆は体の向きをそちらへ変える。

「先に、手続き済ませていいですか？ あと、ここではちよつと。どこか、落ち着いて話せる場所があれば」

彼は頷き、人差し指を上に向けた。

「二階の大会議室が空いています」

長方形に配置された長テーブルは合計二〇。四〇並んだパイプ椅子、角に位置する二つに九〇度の角度で座り、伊奈帆は事情を端的に説明した。

「へえ、軍人さんですか。ご苦勞様です」

「元、です」

伊奈帆は机に置かれたペットボトルのお茶の蓋を開けて飲む。これは先ほど、町長が自分の分と合わせて二つ、一階の自動販売機で購入したものだ。話す間に少し温くなっていて、大粒の結露が腕を伝った。

「その、連れの人も？ 元軍人さん？」

「はい。その、……国籍や所属が僕とは違って。軍関係の手続きに手間取っていて——」
言葉の途中で町長は片手をすっと上げる。

「なるほどね。詳しいことは分かりかねますし、詮索しません。お二人は一般人として居住するんでしょう？」

「もちろんです」

「なら、問題ありません。手続きの遅れは承知しました。担当者には伝えておきます」

「ありがとうございます」

町長もペットボトルのお茶を飲む。席に着いた時に半分ほど一息に飲んでいたが、今度はすぐに口を離した。そのタイミングで伊奈帆は切り出す。

「あの。さっきの話」

「さっきの？」

「この町の、人海戦術の情報ネットワーク」

言葉選びが可笑しかったのか、町長はにんまりと笑った。

「ああ。年寄り連中の井戸端会議ね」

伊奈帆は机の上で指を組む。重心を少し前に、自身の指を見ながら話す。

「それ、気掛かりで。僕らが戦争関係者だということは、あまり知られたくありません」

視線を上げる。町長は問い掛ける目で伊奈帆を見ていた。

終戦からおよそ八年。開戦からは十を数える。それでも、戦争の記憶は褪せない。忘れられない、という表現が的確だ。汗ばんだ操縦桿のグリップ。網膜を焼く上下左右のグリーンモニタ。エアバッ

クの音と衝撃。装甲越しの音と振動。目まぐるしい数字の羅列。コックピットに籠る自分の吐く息。硝煙による目と肺の痛み。銃の重さと引き鉄の反動。鮮血の色の時間変化。宇宙空間における光の意味を考えるのは泥のように眠り、目覚めた後のこと。

「僕は、生き残った。……その意味するところが分かりますか」

死の数なんて覚えていない。数えることすらできなかった。それが日常だったから。

「戦いから。罪の意識や苦痛から、逃げるみたいにここへ来たんです」

当たり前に人を殺す。自分が殺されなかったために。それは異常だ。だけど、確かに現実だった。その現実、今、平和への道を進んでいる。伊奈帆は窓に顔を向ける。ブラインドに切り取られたストライプの空は、映画のエンドロールみたいだ。

「この先はできるだけ、世界と関わらずに静かに暮らしたいと思っています」

地球人でありながらアルドノア因子を持った僕は、戦禍の火種だ。表舞台に存在してはいけないキャスト。ひっそりと、誰にも忘れられて生きていく余生を望んでいる。少なくとも僕は。

沈黙が下りる。二人だけの会議室はがらんとしていて、射し込む窓の光に浮かぶ埃さえ音を発するように感じた。町長である男はじっと考え込んでいたが、やがて深く頷いた。

「わかりました。私にできることは、なんでもさせてもらいます」

「ありがとうございます」

彼は椅子に座り直し、深く頭を下げた。

「若いのに、ご苦労されたんですね。……実は私、東京で仕事をしていたことがあるんです」
火星が攻めてきた時ね、と彼は語る。

「戦闘地帯にはいませんでしたが、恐ろしかった。徴兵前に、おめおめ帰ってきたんです。この町で過ごしていると、戦争は、すごく遠い世界の出来事みたいに思えた」

でも、界塚さんたちは、戦ったんですね。複雑そうな表情で彼は呟く。どう答えたものかわからず伊奈帆は黙っていたが、彼は一度深呼吸をし、表情を明るく切り替えた。

「ところで、お連れさんは、どんな人？ 奥さんですか？」

好奇心が声と表情に出ている。都会ではほとんどされない質問が新鮮であるし、そんな年齢になったんだな、と伊奈帆はなんとなく感慨深い。

「ビジネスパートナーです」

「ビジネス？」

「古民家を改装して、二人でカフェを開こうかと」

「カフェー!!」

バン、と机を両手で叩き、町長は勢いよく立ち上がった。

「それはええ!! ええですねー! そんな洒落たもん、この街にありませんから。あと私にとって画懐かしい家なんです、人が集まる場あになるんは嬉しいですわ。私で良ければ、ええ土建屋を紹介します。任してください」

ノンプレスで言い切り、彼はどん、と、自身の胸を拳でたたく。土地の言葉が出ていて、笑顔は少年のように開けっぴろげだ。

「お言葉に甘えて」

「ははっ、都会の人はクールや。店開く準備ができたなら、あちこち宣伝できるよう取り計いますよつて。開店はいつ?」

「未定ですが、梅雨明けには」

うんうんと深く頷き、彼は天井付近に視線を向けて何やら指折り数え始める。

「役場と農協、あと、ショッピングモールのかしらに言うときましよう。あ、あと印刷所も。ビラとか作らるでしょ? カフェー、カフェーかあ。若い子たち、喜ぶやろうなあ」

二〇二四年五月六日

「伊奈帆君は、軍人さんだろ？」

山の麓にある、唯一の作業所。先の言葉はその主である壮年の男性。旋盤の稼働を止めたタイミングで伊奈帆はその問いを聞いた。

古いオイルの匂いや、錆の浮いたトタンの壁。時代に取り残されたような機械類の精微な凹凸に、磨りガラスから差し込む光度がデッサンのような影を落とす。チンダル現象の空気の先に返答する。
「わかりますか」

男はにやりと笑った。白いものが混じる短髪に日焼けした精悍な顔。四十代後半くらいだろう。
「ここに初めて君が来た時から、わかっていたよ。普通の服を着ていてもね」

俺の爺さんが陸軍の飛行部隊だった、と小さい声で彼は言った。この作業所に初めて足を運んだのは二週間ほど前のこと。そのときから感じていたが、男の低い声と深い瞳は、土地や場所と不釣

り合いに理知的だ。

彼は作業を再開し、自身の手元に視線を落として話を続ける。

「歩き方と座り方と、あと、目が似てる」

「目？」

伊奈帆は左目に手を翳す。自分の手の皺がピンぼけした。ここにあるのは視力を補う機能しかないただの義眼。あの戦争を共に戦った相棒——アナリティカル・エンジン——は、今はもうない。

男はゆるく首を振る。

「言いふらす気はないから安心してくれ。この通り、付き合い下手なひとりやもめだ」

三〇km圏内に軍事基地はない。人口密度が少なく、工業生産力が乏しく、宇宙的なテクノロジーが未発達。主だった戦争被害はなく、軍事要請もない。戦争前後で人々の暮らし向きの変化は少なく、今後地球から火星からも、あらゆる意味で干渉されにくいエリア。そういう場所を伊奈帆は選んだ。選んだはずだった。彼の、いや、僕らの行き着く場所として。

どこまで行っても、逃げられないんだな。

伊奈帆は思い、そうか僕は逃げてきたのか、と自身の心情に今ようやく思い至る。

「その左目は義眼だな？」

男の言葉に、もういいか、という諦観の心地で伊奈帆は素直に頷いた。

「そんなことまでわかるんですか？」

「わかるさ。……俺は昔、医者だったんだ。傷痍軍人をたくさん見てきた」

だからか、と合点する。その所作も、どうも似つかわしくない。閉鎖的な地方の住民には。言葉に訛りがなく、都会的な人稱を使うことがずっと気になっていた。彼も、元は都市で暮らしていた。それなら当然、医者にも軍事要請がかかる。彼は従ったのだろう。

「伊奈帆君は、軍を辞めてここへ？」

「はい」

「大変だったな。戦闘に出たこともない俺なんかが、言えたことじゃないけれど」

だとしても、伊奈帆とスレインを除き、おそらくこの町の誰よりも戦争の近くにいた人間だ。もしかしたら、海外まで従軍したかもしれない。

ノヴォスタリスクに、彼はいたのだろうか。自身の治療に携わった一人なのかもしれないと思うと、伊奈帆は不思議な感覚に襲われた。

逃げのびた民間人の少なさから、避難物資の余りが出るほど悲惨な、第二次惑星間戦争初期の地球戦。僕の命には利用価値があるから、救われたのだと知っている。デューカリオンの再起動を可

能にする、唯一の地球連合軍人だから。

カタフラクト戦闘において、死体の半数以上は残らない。宇宙戦で、その数はさらに増えた。一体どれだけの命が消え去ったろう。殺し、殺され。僕も殺した。そうしなければ死んでいたから。伊奈帆は自身の手のひらを見た。消えない火傷と胼胝がある。カタフラクト乗りの手。銃を持つ軍人の手。奪う手と、救う手があるのだ。そういうことを、久しぶりに考える。

「あの人もそうかい？」

思考に沈む伊奈帆を、男の言葉が引き上げた。背筋に冷たい汗がじっとり滲む。

「あの人？」

「あんたの連れのガイジンさん。あの人も、元軍人だろ？」

見られていたのか。

「ええ」

伊奈帆は頷く。スレインの存在は隠せるものでもないし、隠すつもりも毛頭ない。僕らはここで生きていくのだ。

元医者の方は、考え深く目を細める。作業の手は止まっていた。

「……すまない。まだ子どもだったあんたたちを戦わせて。傷を残して。俺たち大人が、しっかり

していれば」

それは様々な立場の人に幾度も言われた言葉だが、未だにどう答えればいいのか、伊奈帆にはわからない。

「戦争ですから」

結局、この返答に帰結する。そう。それが戦争なのだ。戦わなければ生きられない。子どもも大人も、不自由な選択の中、生きるために、生かすためにできることをしただけだ。

「……貴方のお爺さんは？」

ふと、気になった。彼の祖父は、ざっと計算してもかなりの高齢。第二次惑星間戦争より、ヘヴンズフォールよりも前。人類が月に到達するより更に以前。アルドノアも、カタフラクトもない時代、片道切符の戦闘機による国家間の戦争を経験した兵士なのだ。

「死んだよ。九十六まで生きた」

「ご家族は？」

彼は一瞬言葉に詰まり、やがて静かにこう告げた。

「十年前に爆撃で死んだ。妻と息子がいた」

そして、伊奈帆に顔を向ける。泣き笑いのような表情に見えた。

「こんなこと言って、気を悪くしないでくれたらいいが。……生きていたら、伊奈帆くんとそう変わらなくらいの歳だろうな。君、何歳？」

「二十六です」

へえ、と目を丸くする。

「じゃあ、君より三つ下だ。伊奈帆君、若く見えるね」

「時々言われます」

「ありがとうございます」

「？」

何のことかわからず伊奈帆が見つめると、男は目礼を返した。

「戦争を、終わらせてくれて」

その言葉は重い。戦争を終わらせるには、世界に犠牲が必要なのだと知っている。

「俺は家族を守れなかった。患者の多くも、手もつけられない状態で……、見殺しにした」

違う、と伊奈帆は思う。彼は手を尽くしたはずだ。救った命が、救われた未来があるはずだ。そ

う思ったが、言葉にすることはできなかった。自分を責めるしかないその心境は、よく分かる。

僕だって、離してしまった手がある。見殺しと同じだ。

男はふう、と大きく息を吐き出した。

「君たちは生きている。赤の他人だが、俺は嬉しいよ」

彼は軍手を外し、自身の手のひらを見つめた。

「自分より若い人が死ぬのは嫌なもんだ。……特に、学徒動員のカタフラクト・パイロットは」

まだ子どもだったのに、と呟く彼に返す言葉が見つからず、伊奈帆は機械のスイッチを押した。これで、稼働音で会話はできない。旋盤で木板を成形する間、伊奈帆は、スレインが今の話を聞いたら何を思うだろうと考えた。

「こんなもんな」

成形した木板を持ち上げ検める。男が隣に立ち、ほう、と声を漏らした。

「綺麗な仕上げだ。慣れてるね」

「学校でやりましたので」

「学校か」

複雑そうな表情に、言わなければ良かった、と伊奈帆は思った。しかし、一度口から出た言葉は

無かったことにできはしない。

彼はぎこちない笑顔で、治具に片手をぽんと乗せた。

「俺にできることがあったら、何でも言ってくれ」

「何でも……」

どうしようかな、と思ったが、楽観的な自分が勝った。伊奈帆はガレージの外の景色に顔を向ける。

「次は彼も連れてきます。ここに」

この人は、同じだと感じた。僕と。僕らと。戦争で、大切なものを失い、たった一人で知らない土地にやってきた。亡命者のように。逃避だ。でも、それも一つの生き方だろう。死ぬよりずっといいじゃないか。そういう話を、僕はしたい。

元軍医は腰に手を当て困ったような顔で笑った。

「缶コーヒーくらいしかないが、用意しとくよ」

伊奈帆はくすりと笑う。

「僕ら、喫茶店やるんですよ」

「ああ、そうだった」

「今度来る時はランチを宅配します。サンドイッチでいいですか？」

「もちろん」

待ってるよ、の言葉に伊奈帆は手を振り、車を出す。少し歪な楕円の木板が砂利道でカタコト音を鳴らす。帰ったら、この看板に色を塗ろう。いや、スレインに塗ってもらおう。ペンキ塗りは、やったことあるのかな。好きそうな感じがする。

スレインは、この木を何色に塗るだろう。青だろうか。それとも、黄色を混ぜて瞳の色にするかもしれない。地球を象徴するような澄み渡るブルグリーン。

彼と彼女の眼差しはよく似ている。

家が見えてきた。出かける前に干していた洗濯物はもうない。今日はいいい天気だ。

何かを作って、そうして暮らしていけたらいい。僕ら。逃避でいい。卑怯でも、無責任でも構わない。ここには明日に続く今日があり、僕らはここで生きていく。あの人のように、見知らぬ土地を故郷にして。

※この先は極秘施設時代のかなりしんどいR・18モブスレです。読み飛ばしても大丈夫です。
先のお話は60頁からです。

2021/02/04

ガン、と床に頭を打ちつけられた。ぐわんぐわんと視界が回り、苦痛の箇所が入れ替わる。頭蓋の反響が終われば、痛みは元の場所に立ち戻る。左右に直線近く開いた脚の間で、獣のような律動が腸壁を扶った。

「が、……あ、ッ」

内臓を蹂躪され、酷い頭痛と吐き気を催す。接合部分は麻酔でもかけられているかのように感覚が麻痺し、流れているのが血なのかどうかもわからない。意識が朦朧とする。自分の身体がバラバラになってしまったような錯覚に襲われる。

「……っう、……あ、は」

肉を打つ音が、もうずっとしている。破裂音に似たそれは、密閉された狭い独房の壁に増幅されてとても不快だ。後ろ手に掛けられた手錠が背骨に食い込む。両脚の間で腰を振る男は三人目。荒い呼吸に交じり、周囲で嘲笑が起こる。

「長えよ、お前。早くイけ」

「待てって……！ うっ……！ ハア、ハア、んん！」

この手の暴力に、慣れていないわけじゃない。やり過ぎす方法もいくつかある。別に僕は、こんなことで壊れたりしないけれど。

「いッ……！ ア、ア！」

早く終わってくればいい、よりも。いつそ、このまま殺してくれたらいいのに、と思ってしまふ。これが終われば、僕は医務室で処置されるはず。意識が戻るのは数時間後か、数日後かはわからない。

そして目が覚めた時、あいつが必ずいるはずだ。あいつは、僕の顔を見て、短い言葉を残して帰る。僕がわかる？ とか、水を飲む？ とか。また来るよ、と言い残し、他には何も聞かない。言わない。それが、どうしようもなく惨めだ。

「ハア、ハア、ハア……ッ」

荒い呼吸が鼻にかかった。べろり、とねたつく舌が口を、次に眼球を舐め上げた。嫌悪感に反射的に声が上がるが、喉を右手で握られる。

「……う、ぐあ……」

「はあ……っ、はは、すげえ締まる。本当に男か？」

ハハッ、と複数人の嫌な笑いが降り注ぐ。局部の反射に反吐が出そうだ。思春期の前に開かれ慣らされた身体は、僕の感情や感覚と無関係に、そういう風に反応する。気持ちが悪い。こんなの早く終わってほしい。そう思うのに、そこは痙攣を繰り返し、一層奥を穿たれる。

「早くしろっつってんだろ。次がつかえてる」

「もうちよつと……。く……。うつ、いい……。っ」

腰骨を乱暴に揺さぶられ、接合部分で粘着質な水音がした。ぶつかる音が速くなり、視界が真っ白になる。電気ショックみたいに身体が跳ね、後頭部が高い位置から床に落ちた。

「う、ぐ……。ハ、ア、ハア……。ッ」

息をすると頬を打たれた。ビクビクと動く下半身から、質量を失ったそれがずりりと引き抜かれる。溢れた液体が尻の間をどろりと伝った。

「終わったぞ。次」

「じゃあ俺」

「ハア？ お前さっきぶち込んでただろ」

「いいだろ。クセになるんだよ」

「おい、俺がまだだ。お前は口使え」

「口い？ ……へっ、まあいいか」

二人がかりで口を開かれ、口腔に挿入された局部は喉の奥に達した。嘔吐くが肩も拘束され、仰向けの姿で床に縫い止められる。まるで標本の蝶だ。

「うっ……。おお、どんな具合かと思えば、こりやあ想像以上だぜ」

「慣れてやがんのさ。キレーな顔とエロい体で、火星人をいいように顎で使ってた伯爵様だ」
がり、と胸の古傷を爪が抉った。神経に障り生理的な涙が溢れる。

「傷がちと汚ねえが、ここを責めればイイ声で鳴くし」

下卑た笑い声をして、脈打つ肉を喉に強く押し込められる。饅えた臭いと苦みに喉がひくつく。

「なにせ、少尉のお気に入りだからな」

その言葉にさあっと血の気が引く。喉が詰まったまま呼吸を忘れ、視界が明滅した。

髪を掴まれ我に返る。口を犯す男とは別の男が、反対側から覗き込んだ。口元には薄ら笑いを浮

かべているが、目が笑っていない。

「なあ、ハクシヤクサマ。あの人を、どうやってたらし込んだ？」

咳き込むと、前の男が側頭部を平手で張った。歯があたり、今度は額を拳が打つ。頭上の男が高い声で笑った。

「この身体で誑かしたんだろう？ 誰もかれもさ」

「なあ、それがあんたのやり方だろう？」

「地球人のくせに、火星人に取り入って。地球をぶっ壊そうとして」

「火星の貴族も、女王も手玉に取ってな」

「どっちもイケるんだな」

「見境無しのクソビッチ」

口の中の肉が張り詰め、喉の奥に流れ込む。息ができない。窒息しそうになり跪く。下の方でも動きが止まり、腹の中が熱くなった。

ずる、ずるりとほとんど同時に引き抜かれ激しく咳き込む。横向きになり背中を丸めた。咳をする度、口の中のものが床にぼたぼた落ちて染みになる。

「ハア、ハア、ハア……、……おい、次は？」

「俺だ。こんなんやらねえ。次のやつ、先にズボン下げとけ」

髪を掴んで顔を持ち上げられる。視界を埋め尽くす距離で僕を見る男は、怒りの為に恐ろしい形相となっていた。

「なあアバズレ。お前さ、界塚少尉が軍でなんて言われてるか知ってるか？」

息を飲む。心臓が凍るよう。聞きたくないが、両手を拘束されていて、耳を塞ぐこともできない。

男は一音一音区切るようにこう告げた。

「戦犯に骨抜きにされた腰抜け野郎。って」

許せねえよな、と。

思い切り頭を床に打ち付けられ、三半規管がいかれた。胃の中が逆流し嘔吐する。

「あの人は、俺たちの英雄なんだ」

頭と肩を軍靴の先で蹴られ、うつ伏せになった背中に体重をかけ強く踏まれる。胃液の臭いが目に染みて、涙が止まらない。

「あの人を汚すな」

そんなんじゃない。

「なあ」

首。後ろから握り、持ち上げられた頭を下から覗く歪み切った男の顔は、まだ若い。

「どうしてお前、生きてんだ？」

そんなの、僕のほうが聞きたいくらいだ。そう言いたかったが、意識がそこでプツリと途切れた。

「やあ。僕がわかる？」

「……クソオレンジ」

「減らず口は元氣みたいだ」

喧嘩を売ったつもりだが、界塚伊奈帆はさらりと流した。身体が石になったみたいにならずに、すぐ重くて、すぐ動かすのは無理だろう。意識がはつきりしてくると痛みが知覚され、何があったか思い出した。

またやられた。また生きていた。それだけ。いつものことだ。もう慣れた。だけど。

——少尉のお気に入りだからな。

あの男の言葉を思い出すと憂鬱になる。何を勘違いしているんだ、と立場を忘れて怒りさえ覚える。僕はそんなじゃない。そんな下世話な関係ではないし、今では敵とか味方とか、そういう

次元の相手でもない。一番近い言葉を探せば、似た者同士。出会い方が違えば、よい友人になれただろう。話に一切の手加減はいらず、チェスの実力も拮抗していて面白い。なんの因果か腐れ縁で、そう。ただ気が合うだけだ。軍人と囚人という立場でも。

けれど。周りからは、そうは見えないんだろう。青年将校が敵軍の囚人に立場を越えて傾倒している、としか見えない。絶好のゴシップだ。僕が界塚を懐柔して、脱獄を企てているなんて世迷言を、酒の肴にしているかもしれない。そんなこと、あるわけないのに。

「……お前、もう来るなよ」

「どうして？」

どうしてもなにも。僕が今、ボロ雑巾みたいな身体で横たわる理由を、お前は全て知ってるくせに。知らない間に手当てされて、洗浄だつてされたはず。監視カメラは止められていたそうだけど、内容は文字になって詳細に伝わったに違いない。この口に、この手に、肌に、この中に。男らの欲望を吐き出されたと、知っているんだろう、お前は。知っていて、それで――。

「言いたくない」

「それじゃあわからないよ」

「……」

耐え難い。お前が何も言わないのが。その氣遣いが腹立たしい。

「君の理由に納得できれば、善処する」

「……はあ」

自分がどう言われているか、知らないわけじゃあるまいに。そんな素振り、僕には絶対に見せないんだ。

「戦争は終わった。軍人なんかやめればいい」

向いてない。こんな閉鎖的で雁字搦めに澱んだ世界。僕は知ってる。お前は、そんなに特別じゃない。その抜きんできた能力以外のお前の要素はまともで至極平凡だ。普通の世界で、小さな世界で生きていける人間なんだと。

「僕にかまうな、もう」

僕に付き合うことはないんだ。お前は世界に居場所がある。一緒に落ちる必要なんてない。

二〇二四年六月六日

「うわ、びっくりした」

スレインは声に振り向く。店の玄関口に伊奈帆がいた。

「どうしたの？」

傘を畳んで戸口に立て掛け、近づきながら伊奈帆が聞いた。丸テーブルの窓際席。中庭の全景が見える場所。背もたれに背を預けしばし思案し、スレインは口を開く。

「……別に。見てただけ」

窓の外に視線を送ると、伊奈帆もそちらに顔を向けた。

「今日も雨だね」

「うん」

雨が降っている。ざあざあ、というほど騒がしくなく、しとしと、というには存在感のある低音

の雨音。無数の雫が草木、花に振り落ちる。葉や花卉が雨を受けて蠢き地面のところどころが水面に変容する様を、朝からずっと眺めていた。

雨の夜には、夢を見る。決まって過去の、嫌な夢。思い出したくもない様々な記憶が、出来の悪いパッチワークみたいに断片的に現れる。起きて忘れていることもあるが、今日は生憎そうではなかった。ついさっき現実起こった事のように、肌に纏わりつく嫌な感触が消えない。朝食の席でも現実感がなく頭がぼうつとしていたが、向かいに座る伊奈帆の言葉に相槌を打ち、食事がきちんと喉を通ったことに妙な感慨があった。ああ、意外と大丈夫だなんて。ご飯はちゃんと美味しかったし、夢の気配はそうするうちに薄らいだ。

あんなことが何度もあったが、生きていけるものなんだな。僕は。

伊奈帆が、向かいの席の笠木のカーブに手を置いた。

「ここ、座っていい？」

「……ぶっ」

思わず吹き出す。何を言うかと思っただけそんなこと。

「何かおかしい？」

やや無然とした表情を浮かべ伊奈帆が聞いた。スレインは右手のひらを翻し、対面の席を揃えた

指先で示す。

「お前の店だ。好きにしたら」

「君のお店でもあるんだよ」

伊奈帆はぎい、と椅子を引いた。床に擦れる音が鈍く響き、その音と振動に反射的に指がぴくりと動いてしまう。それに気づいたに違いないが、伊奈帆はこちらを見ずに、窓の外に半身を向けた。彼の横顔を見ていると、少し気分が落ち着いた。

変わらないな、こいつ。合理的で即断即決。頭がいいのに時々ひどく子どもじみたことを言う。そして、ずっと優しいままだ。少しばかり不器用だけど。

「ねえ」

しばらくして伊奈帆が口を開いた。

「ん？」

「もしさ、このまま世界が水没したら」

神話の終末論か？ ノア。それともデューカリオン。どちらにせよ、人類のほとんどは息絶える。

「水没したら？」

こういう話は嫌いじゃないが、今日はあまり聞きたくないな、と思いながら聞いてやる。伊奈帆

「は僕を一瞥し、もう一度雨の庭に目を向けた。

世界が海の底に沈んだら――」。

伊奈帆が頬杖について言う。

「海底カフェを開店するのもいいよね」

スレインの時間が数秒止まった。

「……………は？」

ようやく発声めいたことができた。伊奈帆は僕の反応が意外だったのか目を丸くした。口を尖らせ彼は言う。

「何？ その顔」

いや、こっちの台詞だが。

「……伊奈帆。何か、変なものでも食べたか？ それとも、いかがわしいチャンネルに影響されたか？」

「……一応聞くけど、その見解はどこから？」

ちなみに、食事は三食とも君と同じメニューだよ、と付け加える。

「非科学的。非論理的。はっきり言って柄じゃない」

「ちょっと、そこまで言う？」

スレインの脳内に“海底カフェ”の単語がぐるぐるぐる、と回り続ける。それに伴うメルヘンチックなイメージも。

「神話はともかく、おとぎ話は初めて聞いた。お前から」

「そうだけ」

伊奈帆はとぼけた返事をし、後ろ手で後頭部をかりかり掻いた。

「いや、朝からなんか、深刻そうに見えたから。突拍子もない話で場を盛り上げようと思って」

「……………ほう」

「……………その顔、何なわけ？ にらめっこ？」

「……………ふふ、ははっ」

スレインは腹に手を当て、腹式呼吸で大きく笑った。目尻に涙が滲んでしまっ指で拭う。

「いいよ、その話乗ってやる。海底か。よし。じゃあ、伊奈帆。僕ら、どうやって息をするんだ？」

伊奈帆は椅子に座り直し、肘をついて重心を前に傾けた。

「ボンベしながらお茶飲めないしね。こう、ドームを作る」

密やかな声とハンドジェスチャー。雨の空が海の水面に変わっていくかのような。

「ほう」

「二重扉でね」

「ふうん。食材はどうする？」

「海藻とかから、色々作れる」

「へ？ 本当か？」

「本で読んだ。海藻からジャムを作ったり、海底を潜水服で散歩したり」

「ああ、あれか」

「フィクションだけど本格派で面白い」

「確かにな。あの船長、お前に少し似てる」

「そうかな？」

「偏屈で理屈っぽいところが」

「僕、あそこまでじゃないと思うけど」

「くくっ」

天井を眺め想像してみる。こういう空想が、こいつとできると思わなかった。なかなか新鮮だ。

「お客さんは？」

「潜水服か、潜水艦か……」

伊奈帆がパチンと指を鳴らす。

「いっそ、お店を潜水艦にすればいいかな」

「ますます、あのフィクションだ」

海底を舞台にした冒険小説。施設時代に、本を勧め合った経緯がある。伊奈帆はスレインが勧めた本の一つを大層気に入り、作者の他の本まで読破していた。その内容については、細部は彼の方がより正確に記憶している。

「いいね。海底を移動する潜水艦カフェ。北極海から珊瑚礁まで」

「珊瑚礁か。人魚姫が来るかもな」

スレインは美しい南海を想像してそう言った。伊奈帆の返事がないので見ると、ポカンと口を開けている。

「何だ？ その顔」

彼は顎に手を当て、しげしげとスレインの顔を眺め、そして一言。

「なるほどね……」

へ？ 何が？

「なるほどって？」

「こっちの話」

「二人きりでこっちもそっちもないだろう。何なんだ？」

「うん。君がもてる理由がわかった」

「は？ もてる？ 僕が？」

スレインは意味もなく自身の体を検めた。飾り気のないラフな服。普通の手入れしかしていない肌と髪。手先は水仕事で荒れている。北欧人種は日本のこんな僻地では多少物珍しいにせよ、今の僕に、騎士や伯爵の時のような惹き付ける魅力はないだろう、と結論づける。対人関係については、極秘施設からこっち、特に誰かに思慕を寄せられた覚えもなく。あ、こいつ以外。

「別に、普通だろう？ 昔はともかく、お前の知ってるところでは、そういうことは何もないと思うけど」

「え……、無自覚……？」

伊奈帆が呆然と呟いた。無自覚って？ 客観的な分析のつもりだが……。

大袈裟にため息をつく伊奈帆。眉間に揃えた指を当てる仕草が嫌味つたらしい。

「その、昔っていうの。いつのことだか何があったか、大体想像つくけどさ。僕の見立てでは今の

君の方がずっと……」

沈黙。伊奈帆はまたまた大きな嘆息。そしてふるふる首を振る。

「……これ以上はやめとこう」

いや、気になるだろ。

「何だ？ 最後まで言え」

「ま、そのうちね。それよりお茶飲まない？」

ものすごい力技の話の逸らせ方だが、こうなっては梃子でも無理だ。スレインは仕方ないな、と息を吐き、机に手を置き立ち上がる。

「僕が淹れる。紅茶にするぞ。茶菓子かなんかあったっけ？」

「おかきとチョコレートがあるよ。取ってくる」

チョコレートはともかく、紅茶におかき。双方にとって食べ合わせのファースト・コンタクトかもしれない。

「そこ、濡れないか？」

伊奈帆が店内のガラス戸を開け、縁側に靴を脱いだ足を見せ、スレインは聞く。

「傘、面倒だから」

「タオルも持ってこい。拭いてやる」

伊奈帆は、さあ駆け出す、という体勢でびたりと止まり振り返る。

「……だからさ、……うん。そういうところ」

複雑そうな表情の、前髪が少し湿っていた。

二〇二四年六月十八日

ペラ、と風に翻る紙に、スレインは首を傾げた。とりあえず、盆の上の急須と湯呑み、菓子鉢をダイニングテーブルに並べる。

「何だ？ これ」

「チラシ」

伊奈帆の指がつまむカラー刷りの印刷物を手に取る。抽象的な模様の薄青地に店舗外観と料理の写真が数枚、簡単なメニューと営業時間、アクセスが記されている。その左上には、曲線な書体で白抜きされた“喫茶海猫”という店名。

シンブルなデザインだが、センスは悪くない。こんなこともできたのか、と感心すると同時に、事前の一言くらいあってもいいのではないか、とスレインは思う。

「いつの間に……」

伊奈帆が湯呑みにお茶を注いだ。一つを寄越し、自分の分を一口含んで彼は言う。

「週末、配りに行くよ」

「配りに行くって、どこへ？」

「ショッピングモール、農協、村役場。その他諸々。もう話はついてるんだ。引越しの挨拶に行きたから」

「挨拶？ 一人で？」

「君、目立つから」

「ふーーーーーん」

「不満そうだけど」

「その通り。理由はわかるか？」

「どうして勝手に一人で何でも決めるんだ、って？」

「そこまでわかっていて、どうして事後報告になる？」

「説明が煩わしくて」

「は？」

「勘違いしないで。挨拶先への説明が、だよ」

「ああ……」

「余所者に敏感な土地柄だから。二人一緒だと行く先々で質問攻めに合って根掘り葉掘りと事情を聞かれ、ありもしない噂が尾緒について広がる可能性を考慮した。僕は一般企業の研究職をフアイアして、スローライフでカフェ開業、って設定ね。外国人の連れがいる、ということは伝えてあるから」

「ふうん。僕はこういう設定なんだ？」

「会社で知り合い意気投合。北欧出身。高校生の時に来日、日本語はペラペラ」

「なるほど？」

「君の書類、やっときたから処理してしまおう。とりあえずまず、住民届を出さないと」

机の上にびっしり並んだ紙、紙、紙。伊奈帆の手にはボールペン。宇宙での生活が長かったスレインにとって、紙は空気、土、グリーンと同じく貴重品という認識だ。今の時代に、地球連合軍がこんなアナログな手法を採用しているという事実には肩を竦める。

「引越してから二ヶ月経つが、大丈夫か？」

「たらい回し。軍もお役所仕事だね。役場には遅れるって伝えてあるから心配いらない」

「普通に心配だが……」

伊奈帆が顎に指を当てる。

「それより、どんな名前がいい？」

「名前？ 何の？」

「君の新しい名前」

遠のいていた現実が目の前に瞬間移動したかのように、一度大きく鼓動が跳ねた。スレイン・ザーツバルム・トロイヤードは既に処刑されてこの世に存在しない人間なのだ。伊奈帆と二人だけだと、そんな当たり前のことを忘れてしまう。

スレインは机の木目を視線で辿った。

「お前が勝手に決めてくれ」

「そうは言うけどね……」

伊奈帆は天井を見上げる。彼の視線を追ってみるが、そこには真新しい天井の幾何学模様があるだけだ。あんな柄にしたんだっけか。

ぼんやりと天井を眺めていると、伊奈帆が「あ」と声を上げた。

「レインは？」

「ふえ？ レイン？」

伊奈帆の提案を反芻する。レイン、スレイン、レイン……。

「それ、今とほとんど変わらないぞ？」

「それがいいんだ」

伊奈帆は力強く頷いた。

「呼び間違えても誤魔化せる。それとも、全然違った名前がいい？」

適当な感じもするが、確かに、似ている名前の方が馴染みやすい。これなら僕も呼ばれて気づかないってことにはならないだろう。レイン。レインか。うん。

「別に、それでいい」

「じゃあ、レイン……っと。ファミリーネームの方は……」

伊奈帆がタブレットを起動した。タップとスクロールを繰り返す間、僕は黙って緑茶を啜り、鉢から豆煎餅を一つ取る。袋の上から左右に割ると、パキ、と乾いた音がした。

「北欧系で多い苗字って何？ 日本での佐藤さんとか、鈴木さんみたいな」

伊奈帆が聞くので、ぼりぼりと煎餅を頬張りつつ苗字の候補を考える。北欧といっても色々あるが……。

「うーん……。終わりに“ゾン”ってつくのが多いか？ アンダーソンとか」

「じゃあ、それにしよう。アンダーソン」

「え？ 適当……」

「考えすぎると拗らせて悪目立ちするから。こういうのはフィーリングでいいよ」

「やけに実感が籠ってないか？」

「気のせいだよ。はいこれ。自署」

伊奈帆は書類とボールペンをスレインの方へと滑らせ、菓子鉢からホワイトチョコでコーティングした菓子の小袋を摘み上げた。

そして週末。ショッピングモールの通用口に担当者が待っていた。伊奈帆とスレインは会釈する。

「こんにちは。よろしくお願いします」

「界塚さんですね、どうも」

「こちら、前に話した連れです」

「えっと、レイン・アンダーソンです。よろしくお願いします」

「うおっ、イケメンさんだねえ。モテるでしょ？」

「はは……」

どう反応してよいものかわからず、愛想笑いで対応。伊奈帆以外の人間とまともに会話するのも、よく考えると久しぶりだ。

担当者に従い店内へ。明るい照明と市場のような生活感のある売り場に、スレインの頬が綻ぶ。「エスカレーター前のイベントスペースを使つて下さい。ほら、そこ」

示す先には、五、六人がゆったり談笑できそうなちよつとした空間があった。動線を塞ぐなど、営業の妨げにはならなそうだ。

「こっちでなんか、用意するものある？」

「いえ、大丈夫です」

「オッケー。終わったらインフォメーションで声かけて」

「わかりました」

担当の男性は、スレインの手にあるチラシの束を指さした。

「それ、先に二、三枚もらつていい？」

「もちろんです。どうぞ」

スレインが手渡すと、彼は紙面をざっと眺めてはにかんだように笑った。

「嫁さんと娘に渡すよ。友だち誘って行くんじゃないかな。多分俺が運転手」

「ぜひ、ご家族でも」

「ははっ、そうだね。その時はよろしく」

「よろしくお願いします」

軽快な店内BGMの中、チラシ配りも小一時間。もっと素通りされるかと思っていたが、わざわざ近づいて受け取ってくれる人が多数。このペースなら、午前中に配り終わってしまいそうだ。

「外人さん？ 日本語お上手ねえ」

「ありがとうございます」

スレインが礼を言くと、老婦人は頬に手を当てにつこり笑った。

「お名前は何ていうの？」

「あ、えっと、……レインです」

「レインさん？ 名前が雨だなんて、素敵ね」

「いいお名前ねえ、雨ってお野菜がよく育つから好きなのよ」

「アメさんっていうの？ 日本の人の名前みたいだわあ」

一瞬で集団が形成された。そしてなんか違う。

「はは、ありがとうございます」

愛想笑いでスレインが思案していると、そのうちの一人が伊奈帆の方に顔を向けた。

「アメさん、あちらのお兄さんは？ なんておっしゃるの？」

アメさん……。名前を完全に誤解されているが訂正するのも骨が折れそう。

「えっと、い」

答える寸前、はっとする。伊奈帆の名前……。は本名でいいのか？ そういう打合せをしていなかった。

「い……」

「い？」

「じゃなくて……ほ、ほ……」

「ほ？ い、ほ？」

そのとき、ふっと脳裏を何かが掠めた。あ、なんだっけ、どこかで聞いた。あれは……。

「な？ な……。あっ!!」

「!?!?!」

伊奈帆が勢いよく振り向いた。

「なおくん？ 可愛らしいわねえ」

「アメさんとなおくんね」

「貴方達どういう関係？ 同級生？」

收拾がつかなくなりそうところで、伊奈帆がずずいと間に入る。

「伊奈帆です。名前」

あ、なんだ。本名でいいのか。

「まあ、いなほ、さん？でも、さっきのなおくんというのは……」

「あだ名です。ね。レイン」

「へ？ あ、そう！ あだ名です」

「なかよしさんねえ」

「はい、なかよしです。ね、なおくん」

脇腹を肘でつつき、ちらりと伊奈帆の顔を見る。なぜだか周囲が若干どよめいた。

「え？ あ、えーと……。うん」

「ハハハ」

どっと笑いが起こり、学生風的女子やファミリーがチラシをもらいに駆け寄ってきた。

「スレイン、あのね。僕は偽名必要ないから」

帰りの車に乗り込んですぐ伊奈帆が言った。

「そうだったか」

スレインはハンドルを回しつつ答える。あの後、老若男女に囲まれて質問攻めになってしまった。その時の流れで二人の名前はなおくん、アメさん、で広まり、最終的には店の担当者からもそう呼ばれてしまった。

バイパスを制限速度で走行しつつ、スレインはちらりと助手席に視線を送る。さっきの、怒っているのだろうか。成人男性になおくんは、ちょっとかわいすぎたかな。年下扱いは嫌みたいだし。女性に囲まれ、やいやい言われて拗ねてるのかも。一瞬盗み見た無表情の横顔から、その判別は難

しい。

「ねえ、呼んでみてよ」

しばらくして、伊奈帆が唐突に言った。

「え？」

ウィンカーのパカパカ音も相まって、間の抜けた数秒間が車内に流れる。伊奈帆はサイドウインドウに肘を置き、前方に顔を向けている。

「ほら、さっきの」

「さっきのって？」

「君が呼んだんでしょ。ほら、僕のあだ名」

なぜか声が弾んでいるように思える。拗ねてるんじゃないかったのか？

「ええっと……」

二人きりでいざ改めて、となるとなんだかすごく恥ずかしい。スレインは躊躇った後、ぼそぼそ呟く。

「……な、……なおくん」

「聞こえないよ。やり直して」

「……なおくんっ」

「ぷっ……、あははっ」

「こら、言わせておいて笑うな」

横目で睨むと、伊奈帆はへへ、となぜか嬉しそう。

「いいね。もう一回」

こいつ……。こうなりや、やけた。

「な、お、く、ん！ なーおーくーん!! これでいいのか!？」

「うん。ばっちり」

喫茶海猫開店初日十四時頃。

「なおくんさん、これ、うちで取れた野菜なんだけど」

「（なおくんさん……？）野菜ですか？」

来店した婦人が差し出したばんばんのビニール袋を伊奈帆は受け取る。中身はトマトやキュウリ、ズッキーニなど夏野菜がどっさりだった。

「こんなに沢山、いいんですか？」

「明日もどっさりなるんだもの。ご近所に配っても余って余って」

「そういうことなら、遠慮なくいただきます。ありがとうございます」

どうぞ、と席に案内するところで、ソファア席からどっと笑い声が聞こえた。伊奈帆は目を向ける。スレインが老婦人の四人組につかまって、何やら話し込んでいる。

「アメさん、ほんにお花の手入れお上手だわ」

「(アメさん……)」

お客さんを座席に通し、システムを簡単に説明して調理場に戻る道すがら、スレインたちの会話が聞こえた。

「あのデンファレ、よう美しく咲かんすね」

「恐縮です」

「アメさん、野菜はやらんの？ ゴーヤがそろそろ植え付けの時期よ」

「え？ ゴーヤ？ ですか？」

「ゴーヤチャンプルー知らん？」

「あ、南の方の郷土料理ですね」

「佃煮や天ぷらも美味しいのよ」

「そうなんですか？」

「それに、ネットを張って緑のカーテンにすると、夏は涼しいわ」

「へえ。そんなの初めて知りました。皆さん、お詳しいですね」

「黄色い、かわいいお花が咲くの」

「それは素敵ですね。育ててみようかな」

「種がたくさんあるから、今度持ってくるわね」

「わ、いいんですか？ ありがとうございます。収穫したら、メニューにできないか、なおくんと相談してみます」

「それなら、揚げ物がおすすめよ」

「そうそう。うちの孫もね、ゴーヤー苦い言うけど、唐揚げにしたら食べよるもん」

「それなら、ランチメニューにいいですね」

スレインが戻ってきた。注文紙を渡す際、伊奈帆を見て首を傾げる。

「なんだ？ 変な顔して」

伊奈帆はプリン・ア・ラ・モードの盛り付けの手を止め、天井付近に視線を送る。

「君、適応能力高いよね」

「なんのことだ？」

スレインが不思議そうな顔で見ている。なんて答えようかな、と思いつつ、最後の仕上げで生クリームにチェリーを乗せる。うん、完成。

「なんでもない」

ま、いつか。郷に入っては郷に従え。ちよつと違うかな？ ガラスの器をカウンターのの上に置く。午後の光を浴びて、さくらんぼの赤い影が切り絵のセロファンみたいに影を映した。

「アメさん、これ、運んで」

「オーケイ、なおくん」

扱く自然にウイंकをするスレインに、伊奈帆は肩を上下する。

二〇二四年六月二十六日

「……スレイン」

夕食後。並んで洗い物をしていると、伊奈帆がぼそりと名を呼んだ。

「ん？」

泡まみれの皿に視線を落としつつ、スレインは一音で尋ねる。

「あのさ……」

「うん」

「……………」

ザーーー。一枚。二枚。三枚。

うん。待った方だ。スレインはちらと視線を送り言う。

「何だ？ まどろっこしいな。早く言え」

「ちょっとタンマ」

たんま？

「たんま？ 何だ、それ」

返答はない。たんま、ってどういう意味だろう。スラングか？

「おい、たんま、って何だ？」

「スレイン、あのね」

意を決したようにこちらに顔を向けた伊奈帆は問いを完全にスルー。こいつ……。

「たんまって、何なんだ……」

「ゴメンその後で。あのさ、……これ、洗い終わったら」

「うん」

沈黙。

……………。

うん、待った方……………。

「その、……一緒にお風呂入らない？」

「……………へ？」

お風呂？ 一緒に？

そのくらいのことです？

「それ言うのに、こんなにもつたいぶったわけか？ 馬鹿なのか？」

かしこまって言い淀むから、何かと思えばそんなこと。スレインは拍子抜けして、呆れた声で言い、スポンジと手の泡を注ぎ落とす。

「別にもつたいぶってないよ。あと後半は聞き流す」

伊奈帆は最後の皿をすすいだ後、蛇口の栓をキュ、と締めた。

「それで、返事は？」

「お風呂か？ 別にいいけど」

「いいの!？」

「うわっ！ 耳元で大きい声出すな！」

「あ、ごめん。それより、え、本当にいいの？」

「いいもなにも、今更だろ。週の半分は一緒に寝てるし……。逆にどうしてダメだと思った？」

布巾を手渡しながら言うが、声に呆れが混じってしまう。今となつては見られていないところはないし、それは向こうも同じはず。伊奈帆は手を拭いながら神妙に口を開く。

「覚えてない？」

「覚えてないって……？ 何のこと……。あ」

スレインは声を上げた。思い当たることがあるとしたら、初めての時だ。まだここに来る前。一緒に風呂に入ろうという申し出を、頑なに断ったことを思い出した。

「お前、あんな前のこと……。それで、気にして？ 今まで言い出せなかったのか？」

「前って言っても、ほんの半年だよ」

その時のことを思い出し、スレインは口を大きく歪ませる。そうしないと、にやけた顔をしてしまいそうだったからだ。

「お前……。頭いいのに割と馬鹿だな」

「それ、褒めてないよね？」

伊奈帆はくすりと笑った。余裕ぶって、と横目を送る。涼しげな表情を装っているが瞬きが多い。照れているのはお互い様か。

伊奈帆は布巾を畳んで調理台に散った雫を拭き取った。

「馬鹿になるのは仕方がないよ」

「どうして」

伊奈帆の視線が左右に往復。目が泳ぐという慣用句の見本のような動作だ。やがて観念したように息を吐き言う。

「君のこと好きだからさ。周りが見えなくなることもある」

「……ふん」

肘で伊奈帆の脇を小突く。彼の肩が軽くぶつかる。

そして数分後。湯船に胸まで浸かってスレインは言った。

「……狭いな」

「狭いね」

スレインも伊奈帆も、成人男性にしては体積が少なめの体格ではある。が、浴槽に向かい合って入ると、どうにも脚のやり場に困る。膝を曲げてもしどうしてもお互いの身体に絶対に当たる。なので、二人とも両膝を立てて腕で胸に引き寄せる体勢、伊奈帆の文化圏の言葉で言うところの“体育座り”で向き合っているこの状況。

「……」

「……」

「……………」

「……………おい」

「何？」

「なんか言え」

「そうは言われても。この至近距離で、……面と向かって言葉なんか出てこないよ」

「なんで？ ちゃぶ台で向かい合ってるのと、そう変わらないだろ」

「……もしかして、わかって僕をからかってる？」

「は？ なんのことだ？」

伊奈帆は無然とした表情でしばし逡巡し、バスタブに手をかけ腰を浮かせた。

「向きを変えよう」

「へ？ わっ！」

ざぶ、と湯船に波が立つ。顔に湯がかかり、スレインは臉を閉じて手で拭った。

あつという間に脚の間に伊奈帆は身を滑り込ませ、胸に彼の背中があった。鎖骨に髪が当たり、濡れた部分が肌に張り付く。

「あ、これなら脚伸ばせる」

ぐ、と背中に胸を押される。浮力があるので重くはない。

「こら、あんまりもたれるな」

「んー」

「しょうがないやつだな……」

同じ方向を向いているのでお互い顔は見えない。鼓動が一方的に伝わるのが少しばかり気に入らないが、確かにさつきよりいい。割と、うん。落ち着く。誰かと一緒に風呂に入ったことが無いわけじゃないけれど、こんなに狭くて密着していても嫌じゃないのは不思議だ。好きって、つまり、そういうことなのかな。とか考えてみたり。

去年のことを思い出す。好きだって言われて。僕も好きだったって気づいて。それで、僕ら……。

「……ねえ。どんな気持ちだった？」

伊奈帆の声は囁きくらいの大きさだったが、やけに大きく響いて聞こえた。風呂は、そう。思いのほか声が反響するんだ。

「だった？ って？」

「ほら、あの日さ。別々にお風呂入ってる時」

「ああ……」

風呂に一緒に入るのを真っ赤になって駄目だと言ったら、伊奈帆が渋々引き下がった。あの時のやり取りを思い出すと微笑ましくて、スレインは小さく笑みを漏らす。答える前に伊奈帆が言う。

「僕は、すっごいドキドキしてた」

「まあ、僕もそう」

「なんか色々、葛藤もあって」

伊奈帆の首の後ろを見下ろしながら、彼の言葉を考える。葛藤か。伊奈帆は生来迷いのない男だ。いつだって熟考即決即断。僕はともかく、家族や友人にだって相談しない。

悩むことがあるとするなら……。

「男同士だから？」

スレインの言葉に、伊奈帆の後ろ頭は首を振った。

「違うよ。そんなんじゃないくて、……君が施設にいた時のことを、思い出して」

鼓動が跳ねた。その振動も身体の強張りも伝わったに違いなく、伊奈帆は向こうを向いたまま静かな声で囁く。

「こんな話、嫌？」

スレインは、ふう、と深く息を吐いてお湯の匂いを吸い込んだ。ここは大丈夫だ、って感じがした。

「嫌じゃない。続けてくれ」

伊奈帆が小さく頷く。俯き加減の後頭部は、慎重に言葉を選んでいるようだった。

「僕は、君を傷つきたいわけじゃないんだ」

「知ってる」

「でも、……なんて言うか。いろんな君を知りたいし、僕のこと知って欲しいって気持ちもある」

「わかるよ」

「うまく言えないけど、……うん。君しかないな、って。それは今も」

彼は自身の膝を抱えた。丸まった背中に浮き出る背骨をぼんやり眺める。

「キスしたり、触れ合ったり、そういうことをしたいけど。生きてるって、身体で感じ合いたいけ

どさ。でも……」

そこで彼は息を継ぐ。声が少し低くなる。

「傷ついた君を見たから。何度も。君を傷つけた奴らと、何が違うのかな、とか。僕だって、君を傷つけるだけなんじゃないか、とか。……そういうことを考えた」

スレインは浴室の天井に顔を向けた。湯気で曇った天井は、暖色灯でオレンジ色に照らされている。

「……いつもいたな。目が覚めたら」

「君は嫌がるって知ってたけど、どうしても目覚めるまで待ちたくて」

少し驚く。知っていたのか。知ってて、いたのか。いつも。何時間もただそこに。

当時のことが思い出される。ベッドサイドに佇む彼を僕は何度見上げたらう。昼間だったり、夕暮れだったり。夜更けの雨の日もあった。具合はどうか、水はいるか、そういうことを聞くだけで、事情も何も聞かずにあっさり帰っていく。

「嫌がられると知ってて、どうして？」

その気遣いが嬉しくもあり、腹立たしくもあった。全部知っているくせに、って。どうして優しくするんだって。あの時はそう思っていた。

「もう二度と、目を覚まさなかったらどうしようって。……でも、君はいつも、ちゃんと目覚めてくれた」

死ななくてくれて、良かった、って。僕はいつも思ってたんだ。伊奈帆は途切れ途切れに言った。ああ、僕は、そういう気持ちを知っている。目覚めるのを待つ不安と孤独。瞳の色を思い描き、

閉じた臉を見つめることしかできない、自身の無力さ。

スレインはバスタブの縁に置いた自身の右手をぎゅっと握る。

「……伊奈帆」

「うん」

爪が手のひらに食い込む。臉を閉じる。息を大きく吸うと、湿気で咳き込みそうになった。

臉を開く。

「初めて、お前とするってなった時な。……僕は、あの時少し怖かった」

「……うん」

伊奈帆の緊張した声に、離す勇気が湧いた。

「それは、……お前が、いざという時になって、僕に幻滅するかもしれないと思ったからだな」

「幻滅？」

ちやぶ、と水音。僕は向こう側のバスタブに押し付けた足の指を曲げ伸ばす。

「知ってるだろう？ 僕にとって長い間、暴力は日常で、そういう行為に身体が慣らされてること」

いつか話さなければと思っていた。それが多分、今なんだろう。

「気持ち悪くて吐きそうで、死んだ方がマシだと思うのに、身体が勝手に反応する。中が濡れて、びくびく締める。そうになると、連中ゲラゲラ笑って言うんだ」

「ビッチ、アバズレ、雌猫、豚、……スベタなんてのもあったか」

バスタブに乗せた手は、強く握り込んで知らずに震えていた。伊奈帆の手が、僕の手になった。優しい仕草にうっかり涙が出そうになる。

「昔のことだ」

笑い混じりに軽く言ったが、今、顔を見られていなくて良かったと思った。

「……でも、もし、……伊奈帆。お前にそんな風に思われたら、って考えてた」

「……そうなんだ」

今こいつ、どんな顔をしているんだろう。僕と同じで、顔を見られていなくて良かったと思ってるのだろうか。

「でも、それはまだいい。軽蔑には慣れてる。それよりも怖かったのは、……そのことが、お前を傷つけてしまうんじゃないかってこと」

「僕が？ どうして？」

振り向きそうになるのをやめた、という感じで、伊奈帆の肩が傾き戻った。

「お前、変わったところもあるけどこういうこと、すぐまともだから。いくら映像記録や書面で知っていても、実際に……。その、セックスしたら、わかるだろう？ 僕がどんなことをしてきたか……。騎士や伯爵になってからも、懐柔や掌握のため、身体を差し出したことも何度だってある。それは自分の意思で、だ」

伊奈帆の肩が強張っている。背中も。胸にも腹にも彼の体重を感じない。手だけが強く接している。

「散々オモチャにされて手垢がついた身体だって、頭で知ってはいても。実際触れるのは違う。そういう痕に、お前は傷つくかもしれない」

伊奈帆の指がぎゅ、と手の甲を握った。

「だから……。あの日な。とにかく、身体中を洗った。内側も、これまでで一番。染みついた汚れが、少しでも取れるように。一緒に入るのを断ったのは、そういうわけ」

やっと言えた、と呟くと、伊奈帆はうん、わかった、と応えた。スレインはゆっくり瞬く。

「風呂から出ると、お前がいて……。普通の服着て、少し緊張してるのも分かって。……。なんか、ものすごく安心した」

あの日の一コマ一コマが臉の裏に浮かんでくる。優しい色と柔い温度で。

「傷痕を触る時、聞いたよな。痛い？　って。お前の手は、触れ方は全然痛くないけど、僕はずっと痛かったんだ、ってあの時やっと気づいたよ」

あんな風に触られたのは初めてだった。戸惑いも大きかったが、それより大きかったのは。「お前が触れた場所から、毒が抜けていくような感じがした」

身体中にじんわり広がったのは安堵。そして、僕は生きてるんだっていう実感。

「すごいな。全然違うんだ。初めて、ちゃんと気持ちいいって思った」

「そっか」

伊奈帆の背中が胸に深くもたれ、頭がこてんと肩に乗った。つむじと鼻先が見える。

「……実は、時々夢に見る。昔のこと」

「うん。わかるよ」

やっぱり気づいてるか。そうだよな。一緒に暮らしてるんだから。

伊奈帆の腹に腕を回す。体温もお湯もあつたかい。

「でも、ちゃんとご飯が食べられるんだ。今は」

「うん」

温かい水の中でその腕を彼の手が撫でた。

「眠るのは少し怖いけど、目を閉じて少ししたら、ちゃんと朝が来る。胸で手を握る。ペンダントの硬い感触を確かめて思うんだ」

「うん」

「こっちが僕の現実なんだ、って」

顔を彼の頭に当てる。左側の耳の上。腕にギュッと力を込めた。
生きている。僕も。伊奈帆も。

「スレイン」

「ん」

「僕、君が好きだよ」

大きく水が位置を変え、伊奈帆の手が肩を掴む。顔を上げると視線が交錯した。

「ああ。知ってる」

伊奈帆が微笑む。今、笑ったのかな、僕。

額がこつんと重なって、唇も重なる。瞼を閉じると水滴が頬を伝って舌に至った。

「伊奈帆。僕も、好き」

「うん。ちゃんと知ってるよ」

心臓が互い違いに鼓動する。強さもリズムも同じじゃないのが、こんなに嬉しいことなんだ。

2023/12/23

「……あ、ちょ、……待ってくれ」

ふは、と唇が離れる。大きく息を吸う音がした。

「嫌だった？」

伊奈帆が心配になって聞くと、スレインは首を振る。碧の両目を左右に泳がせ、俯き加減で目を伏せた。なんだろう、と言葉を待つ。頬と目の端が赤いのは、アルコールのせいだろうか。

「……そうじゃなくて、その……。先に、シャワー。いいか？」

しばらくして、スレインがぼそぼそと呟くように言った。

「あ……、そっか。うん」

急に現状が理解できて、伊奈帆の頭脳はフル回転した。アルコールのせいで普段よりはスローだが、これから何をするのか、どうなるのかという様々なケースが枝分かれして映像化され、体感温度が上がった気がする。

「……お前も入ってきたら」

そのままの体制で約二分。痺れを切らしてスレインがぼそつと言った。伊奈帆ははつとして、繋いでいた手を離し後ろに一步下がる。

それはそうだ。お風呂に入らないと。もちろんそのつもりだが……。

「一緒に入っちゃダメ？」

伊奈帆が聞くと、あんぐり、と口を開きスレインは固まった。

「だ、だ、駄目だ！」

そして即答。声が大きい。

「どうしても？」

しかし伊奈帆も食い下がる。スレインは赤い顔で口をばくばくとさせた。うう、と呻き声を上げ、唇を尖らす。

「……………ダメ。その、…………準備とかあるし」

「準備？」

いよいよ耳まで真っ赤にして、スレインはぶんぶん首を振る。

「ああもう！とにかく駄目ったら駄目だ！いいか？お前はあっち！風呂入って、集合な」

「わかった」

あまりの剣幕に、伊奈帆はホールドアップでこくこく頷く。鍵はそこにあるから、とスレインは玄関の方を指差した。

「お邪魔します」

インターホンを鳴らしても返事がないので、借りた鍵で扉を開けた。伊奈帆はサンダルを揃え室内に入る。とりあえず部屋着のスウェット姿でやってきたが、この格好で変じゃないだろうか。何にせよ外廊下を裸で歩くわけにもいかないから、これでいいということにする。

リビングへの通路の途中、浴室から水音がした。伊奈帆は風呂を済ませて一度買い物に出てから来たが、スレインはまだ入浴中らしい。

夕食の食器などが出っぴなしいなっている。そういえば食事の最中だった。待つ間に伊奈帆は

リビングの片付けに取り掛かることにした。キッチンの流しに運んで濯ぎ、スポンジで泡を作って洗い始める。座っていても落ち着かないし、体を動かした方が気は紛れる。風呂場の水音が微かに聞こえ、食器を泡塗れにしながら中の様子を考えてしまう。

一緒に入るの絶対駄目！ って言ってたけど、準備って何してるんだろう。想像して、かあっと耳が熱くなった。

蛇口を開き、泡を流す。洗い籠に端から食器を並べていく。泡の清潔なおいと皿の白さが呼び覚ます光景があった。オキシドール。ガーゼ。包帯。パイプ椅子と緑のカーテン。窓から射し込む外の世界の光の色合い。

開く寸前の瞼の震えを覚えている。睫毛の落とす頬の影と噛み締めて血が滲んだ唇も。

極秘施設の医務室で、何度も何度も見下ろした。それは朝だったり、夜だったり、夕方だったりした。傷だらけの顔。手首には手形の青痣。首周りには咬み傷や鬱血があった。見てはいけないうな気がして、それに気づくと僕は視線をそっと外した。何枚の捕虜虐待の報告書を、僕は破り捨てたい衝動に駆られただろう。

欲望の捌け口。彼はそういう対象だった。あそこで。いや多分ずっと。火星でも、衛星上でも、多分、月でも。地球人だから。囚人だから。

……なんだよ、それ。同じ人間じゃないか。

キュ、と水を止める。布巾で濡れた手を拭いた。続いて濡れた皿を拭く。

何もしないのが信じられない、ってさっきスレインは言ったけど。僕だって、そういう欲がないわけじゃない。ただ、立場を利用して、そういう奴らと同じになるのは嫌だった。だからあえて考えないようにしていたのかもしれない。いざとなつて、かつての痛々しい姿を思い出してできなくなつたらどうしよう。……やつぱり、がっかりするのかな。

かちや、と軽い感じで扉が開く音がした。

「あ。片付けてくれたのか、悪いな」

食器を棚に仕舞っている、スレインの声がした。振り向き、伊奈帆は動きを止めて彼を見る。スレインが怪訝な顔で眉を寄せた。

「何だ？」

スレインは紺色のシャツパジャマを着ていた。頬の血色がよく、髪は乾かしたばかりで毛先がふわふわしている。何も着ていなかったらどうしよう、と思っていたので、一般的な風呂上りのスタイルに伊奈帆はものすごくほっとした。

「パジャマ姿、初めて見た」

「そうだっけ」

スレインは自分の格好を上から下までまじまじ見定め、小首を傾げる。

「何も着ていない方が良かったか？」

「えっ!!」

「うわ！急に大きい声出すな。冗談だ」

「あ、そうだよね。びっくりした」

想像してしまった。でも、そうか。すぐにそれ、想像じゃなくなるんだ。そう思うとまた耳が熱くなる。なんかいい匂いがするし。

「……反応に困る」

「ははっ」

しん、と二人黙り込む。伊奈帆は斜め下を見た。視線を合わせるのが照れくさい。スレインが流しに移動し、コップに水を注いで飲んだ。ごくごくと上下する喉仏。コップの縁から口を離し、彼は遠くを見る目で小さく呟く。

「いいのか？ お前」

「君こそ」

「僕は……」

スレインは口を結び、視線を頭上にぐるりと大きく巡らせた。

「……こういうの、痛いし、苦しくて面倒だった。ずっと」

でも、少し俯いた。髪が眉と耳を隠す。

「今は、そうじゃない。初めての感じ。嬉しい……のかな。多分」

顔を上げ、照れたように笑うスレインを見て、伊奈帆も自然と微笑んだ。

「僕も、多分同じ気持ち」

ベッドに並んで座る。二人とも黙ったまま。何か言ってくれたらいいのに、と伊奈帆は思うけれど、声を出すのも顔を見るのも恥ずかしい。

盗み見るように視線を送ると、目が合った。バツが悪くて小さく笑う。

「伊奈帆、緊張してる？」

普段よりくだけた口調でスレインが聞いた。少し屈んだ上目遣いが悪戯っぽい。

「うん、……あのさ」

「ん？」

吐息のような返答に顔が赤くなるのを自覚する。

「言ってほしい。すぐ。痛かったり、苦しかったりしたら」

スレインは目を見開いた。小さく開いた口がやがてカーブを描き、目元が三日月みたいに細まった。

「そうする。……ふふっ」

「何？」

「いや。……そんなことを言われたの、初めてだから。変なかんじ」

「そうなんだ」

シーツを握る手の甲にスレインの手が重なった。手のひらを上に向けると、指の間に指がそっと入り込む。

「お前のそういうところ、……うん、嫌いじゃない」

頬に触れると、少し笑った。弧を描く唇を親指で撫でる。目を閉じた方がいいのかな、と思いつながら顔が近づく。瞳が大きく見えてくる。虹彩の放射状の模様までが鮮明になり、睫毛の感触を鼻先に感じた。唇が重なり、接したままで口が開く。不思議と甘い。さっきの味と全然違う。

「……ん、……ふ」

齒列をなぞる舌先は熱い。唾液が混ざり合い、嚥下。抱く肩が強張り、背中に回る手の爪の先が服を搔く。頭がぼうつとして、身体が意識の外にはみ出る。何かすごくもどかしい。こんな感覚、初めてだ。

「ふは、……あ」

唇が離れ、仰反る喉。上下する喉仏にキスを落とす。背中の指が服をたくし上げるのが分かり、抱く背を引き寄せ裾から手を入れ、背骨のアーチを撫で上げる。びく、と布越しに接した腰が緊張した。

「……ふ」

初めて聞く声にドキドキする。顔を見ると、目が合った。とろんとした顔に、照れ臭そうな微笑みが浮かんだ。

「……どした？」

「えっと……」

どうしたと聞かれて、即答できない自分に驚く。上手く頭が回らない。スレインの手が僕の手をそっと握り、自分の胸に宛がう。左胸の鼓動が手のひらに伝わった。

「速いだろ」

「うん」

「な、……自分でも驚いてる」

手の指が交互に絡み、鼓動を手のひらで聞く。心臓が動いてる。ちゃんと。そのことになんだか感動してしまつて、しばらく言葉が出なかった。

「ほら、……こう」

重ねた手に誘われ、乳首を服の上から軽く摘む。少し弾力があつて、人差し指の腹で擦ると先端はすぐに硬く尖った。

「……う」

親指と中指でくりくり擦り、人差し指の爪の先で軽く押す。背中が大きく仰け反り、じれったそうに腰が揺れ出す。控えめな衣擦れの音が呼吸音に交じって聞こえる。

「あ……、う」

熱っぽく変わる吐息と硬い突起に生唾を飲み込む。反対側は触ってないのに固く盛り上がってびくびくしていた。スレインは首をゆるゆると振る。

「こら、もう、別のところも……」

「別のところって？」

ぎろり、と涙目が睨む。目の縁が赤い。ドキッとするが、とりあえず彼の言葉を考える。でも、別のところ、って言われても。

「ごめん、……えっと、どこ？」

ぽかん、という顔。数秒後、肩がワナワナと震えた。

え？ 泣く？

「……………ぶっ、あははっ！」

スレインは吹き出し、そしてケラケラ笑い出した。

「何？」

何を笑われているのかわからない。伊奈帆がむすつとして聞くと、スレインはなぜか僕の頭を撫でた。年下扱い、というより子ども扱いされた事実により若干腹が立ったが、無邪気な笑顔でその不満は消え失せた。

「ふふっ、ははっ……、いや、いい。そっか」

手首を優しく掴まれ、促される。腰骨を辿り背中側へ。パジャマのウエスト部から手を差し入れる。

「あ」

ええと……。はいてない。そういうもののかな。

「……くすぐりたい」

おそろおそろ手を滑らせていると、スレインはくすぐす笑った。割れ目に沿って指を進める。

「……あ」

中指の腹でそこに触れると、びく、と背中が張り詰めた。押してみると思ったよりも柔らかく、湿りを帯びていて熱い。

ここに、今から……。

ごくり、と伊奈帆の喉が鳴った。聞こえたようで、甘い声が耳朶にかかる。

「もう、いいだろ？ 服……」

背中に回る腕が伊奈帆のスウェットシャツをたくし上げる。右手でそこを触ったまま、左手でパジャマを引き下げると、曲げ上げた脚がすりと抜けた。第一関節まで挿れていた指を抜き、身体を起こして伊奈帆も自分のシャツを脱ぐ。床の上に重なった。仰向けの胸のボタンに手をかけ、両手で一つずつ外す。その途中でペンダントの飾りがシートにころんと落ち、首飾りの鎖が喉を横切る。首筋を辿るとくつきりと浮き上がる鎖骨の影。露わな胸に無数に残る傷痕は赤みを帯びていた。

「……ばか、そんなに見るな」

夢中で見ていたことに気づき、服からパツと手を離す。

「あ、……ごめん」

素肌に触れるのを躊躇っていると、スレインはそつと目を伏せた。顔を横に向けて言う。

「……その気がなくなったのなら、やめてもいい。……誇れる傷痕ばかりじゃないから」

傷ついた声だった。顔の横に投げ出した彼の手を思わず握る。

「そんなじゃない」

問うような目が僕を見る。言葉が見つからず、手の甲にキスを落とす。言葉がまとまり、口を開く。

「痛い？ 傷痕に触ったら」

「……別に、……引っ掻いたりしなれば」

「触っていい？ 触れるだけ」

スレインは怪訝な顔で僕を見返し、やがて小さく頷いた。

「……うん」

鎖の近くの白く盛り上がる傷跡に、指の腹で触れて聞く。

「……痛い？」

スレインの顔を見ると、眉尻を下げ困ったように微笑んでいる。

「全然。くすぐったい」

鎖骨の下。胸骨の間。みぞおちに、脇腹。無数にある傷跡の一つ一つを指の腹でなぞっていく。時々、小刻みに肩が揺れた。

「なあ。どうして傷に触る？ そんな趣味じゃないだろ？」

じれったそうに囁く彼に、手を止め聞く。

「嫌？」

「嫌っていうか、不思議だ」

引っ掻いたりしなければ、という、さっきの言葉が蘇る。この傷の上に爪を立てたり、打ったり、裂いたり。これまで何度もそういうことがあったんだ。

「君を、傷つけるのが怖い」

スレインは愛おしそうな手つきで僕の頬に触れた。

「そんなに簡単に、壊れたりしないさ」

慣れてる、と君は笑うけど。

「そうじゃなくて……」

慣れてるから、と。以前から何かにつけて君は言う。けれど、慣れているから平気ってわけじゃないはずだ。肩の強張りやヒュ、と小さく息を飲む音。身構えるような反射の後で、はにかむように微笑む。なんでもない顔をして。

伊奈帆は頬の手に自身の手を重ねて握る。

「平気なふり、しないで」

目を見開いた後、眉尻を下げ、はにかむように笑って言った。

「嫌なら言うさ。お前なら」

キスをする。不思議と甘い味がした。

中指に沿わせて薬指を挿し込む。窄まりがきゅう、と指を締め付けた。

「あ、う……」

呻き声に手を止める。顔を見ると、スレインは眉を顰めて瞼を固く閉じていた。指をもう三本、根本まで挿入している。

「ごめん、痛い？」

身体が強張って、呼吸が浅い。やめた方がいいだろうか、と指を抜こうとしたが、気づいた彼にパツと手首を握られた。

「だい、じょうぶ……、もうちょっと、奥……の、上……」

はあーっ、と大きく息を吸い、胸が大きく膨らんだ。ペンダントが傾き、鎖がチャリ、と音を立てる。震える睫毛が頬に落とす影を見下ろして、伊奈帆は言われた通りにゆっくり指を動かした。

「……ここ？」

「う……っ、……そこ、強く」

「……こう？」

ざり、という感触が指の腹に伝わり、同時にびくんと腰と脚が痙攣した。

「はあ……、っ……」

仰け反る背骨の凹凸を手のひらで撫で上げる。左右に開いた脚の先が、もどかしそうにシーツを搔いた。中心部は熟れて熱い。

「……………っあ！……………あ、まって……………！」

切羽詰まった声がした。瞳に膜が張っている。瞬きしたら溢れそうだ。

「どうしたの？ 痛い」

スレインはふるふる首を振る。髪先が跳ね、ネックレスが音を立てた。

「わからない……、こんなの、初めてで……どうしたらいいか……」

「えっと……初めてって？」

聞いた後で無神経な言葉と気づいたが、スレインは怒ることも、傷ついた表情を浮かべることもなく、呆然と呟いた。

「あ……。その、……好きな人とするって初めてだから。こんなに違うものか、って」

好きな人……。言いたいことはなんとなくわかるけれどピンとこない。

「……どう違うか、聞いてもいい？」

スレインは自身の肩を抱き、枕に深く頭を沈めた。

「自分が自分じゃないみたいで……、どうなってしまうか怖い。……あ、嫌じゃないんだ。全然、痛くもない。ただ、すごく気持ちいいから……。それが怖い。こんな感じ、知らなくて……」

瞬きで目尻が濡れて、頬は真っ赤に染まっている。潤んだ瞳と困った顔でぼつりぼつりと繋げる言葉は、思いもよらないもので。

……えっと。

「……伊奈帆？」

見上げる顔を見てきたのに見ていられず、伊奈帆はふいっと横を向いた。自身の口元を手の甲で覆う。

どうしよう。すごく……。そう、すごく嬉しい。すごく好きだ。世界で一番。

「……なんか、その……。反応に困る」

本心を言えずぼそぼそ呟く。口元の手には彼の右手が触れた。

「……ふふっ。そればかりだ、今日のお前」

口を覆う手を引かれ、首の後ろを左手が触る。

「きて」

キスをする。齒列をなぞる舌尖を捕え、舌の裏を舌で擦る。喉の奥に吐息があたり、唾液が口から一筋溢れる。

「いいの？ 多分その……。止められないと、思うんだけど」

愉快そうに喉が笑った。頬にちゅ、とリップ音。

「いいよ。……お前の。全部欲しい」

「……っ、あ、ア！」

うねるように腰が回り、仰向けの後頭部が枕の上で左右に振れる。ナカは湿り気を帯び始めた。徐々にほぐれ、内側の肉が柔らかく脈動する。

「は……、ふ……あ」

手が枕の端を握りしめる。呼吸は不規則だが深く、目元と耳が上気し赤く染まっている。額の汗が鼻筋を伝った。

気持ち良さそう。さっきの場所を何度か擦る。立てた膝が伊奈帆の腰を強く挟んだ。挿入した指に微弱な痙攣が伝わる。びん、と膝から先が張り詰めて、背中が反って硬直する。びく、びくんと指を締め付け、声にならない悲鳴がか細く尾を引いた。

「はあっ、はあっ、はあ……、い……っ、いなほ……。もう……、いいから……」

スレインは顔を横に向けたままか細い声で言った。瞼を開いてこちらを見る、初めて見るとろんとした目。ドキドキしながら、伊奈帆は顔を近づける。

「はやく、……我慢できない、もう……」

スレインの手が下に伸びて、スウェットの上から中心を撫で上げた。ぞくぞくした感じが背筋を

上る。腰に巻き付く脚の膝を慌ててぐい、とこじ開けた。

「ちょ、ちょっと待って」

「はあっ？」

ぎろ、と目つきが鋭くなった。げし、と蹴りが脇腹に入る。割と痛い。

「待てない。もう、こんなになってるんだから……」

ズボンを脱がそうと引っ張られるが阻止する。さっきまで割といいムードが高まっていたが、じゃれあい半分本気半分の攻防戦に切り替わってしまった。

しかし、ここで流されてはいけない。伊奈帆は立ち上がり、顔の前に片手を立てる。

「ごめん、ちょっとだけ」

スウェットのポケットに手を入れる。取り出したものをスレインはしげしげと見つめた。

「なんだそれ」

予想外の反応に驚きつつ、伊奈帆はそれを親指と人差し指でつまんで見せる。

「えっと、コンドームだけど」

「……は？」

「……え？」

数秒間、ただ見つめ合う時間が流れた。ロマンチックな雰囲気は皆無の。

「……ふふ、あははっ」

スレインが肩を揺らして笑い出し、伊奈帆は少しムツとした。

「いや、笑い事じゃなくない？ いるでしょ」

当たり前のことをしているだけだ。携帯用の軍需品にも必ず入っている。

スレインは笑いが収まると、胡座を組んで自身の首を逆手で触る。

「……ふふっ、うん、そうだな。笑ってすまない。違うんだ。からかったり、そういうんじゃない。

僕はそういうことをされるの、初めてだから」

胡座を組んだ足首を掴み、スレインは首を傾けて笑窪を見せた。

「お前、いいやつだなあ。伊奈帆」

今のやりとりで生じた複雑な心境が、その笑顔で吹っ飛んだ。

「今更じゃない？」

「そうだな。……今更だ。ありがとう」

スレインが伊奈帆の頭をぼんぼん叩く。その手が伊奈帆の手の中のものを攫っていった。

「え、何」

「寄越せ。僕がつける」

「それはちょっと」

取り返そうと手を伸ばすが、失敗。頭上でひらひら振りつつスレインは口の端を持ち上げる。

「ちょっと、なんだ？」

「恥ずかしいよ」

ふん、と顎を上げてスレインは言う。

「こっちはもっと恥ずかしいんだぞ。ひっくり返して全部見られて」

「う……」

確かに。それはそうだ。

「観念したか？」

「うん。お手柔らかに」

スウェットと下着を脱いで床に落とす。スレインは悪戯っぽく微笑んだ。ゴムを右手に握り込んで身をかがめ、既に硬くなったそこに顔を寄せる。先端に唇が触れ、舌が先走りをべろりと舐めとる。竿の部分の指が包み、ゆるく上下に往復する。

「……っ、く」

溝の部分に爪先が当たり、亀頭が口に含まれる。舌と頬、歯が敏感な場所を焦らしながら刺激して、指が優しく包み指で押す。口腔と手の愛撫を受け、そこはドクンドクンと鼓動に合わせて張り詰める。

「ちょ……、もう、いいよ、つけて」

「んー」

「わ！喋らないで。出ちゃうって」

「あしたらしい」

「ええ……、うあ……っ」

「ふっ……、あかったわかった」

ぱちゅ、と音を立てて唇が離れる。外気の温度差にびく、とそこが大きく震えた。危ないところだった……。

スレインがべり、と口で封を切り、スキンをペニスに手早く被せる。

「準備オーケーか？」

ぺろり、と自身の唇を舐め、スレインが不敵な表情で聞いた。いい顔だな、と思いつつ、してやられた感がある。

「っ、まあね、……そっちは？」

スレインが身体を起こし、膝でにじりよった。胸と腹が接し、下腹部が密着する。

すり合わせた陰茎にたたり、と彼の滴りが伝う。動く、ぶるん、と位置がずれ、先端が互いの腹に当たった。

「だから、さっきから言ってるだろ。もう待ちきれない」

はあーっ、と一度大きく息を吐いてスレインは膝立ちになった。伊奈帆の性器に手を添えて、自身の後孔にあてがう。腰を揺らして調整し、伊奈帆の両肩に手を置いた。

「……じゃあ、挿れるぞ」

「うん」

張り出した腰骨を掴み、伊奈帆は彼の体重を支える。対座で向き合った状態で、ゆっくりと腰が沈んでいく。

「う、う……っ」

苦しそうな吐息が耳の横にある。先端が出たり入ったりして、ちゅばちゅばと卑猥な水音を立てる。亀頭に伝わる体温と脈動が心地よくて、すぐに達してしまいそうだ。放出の衝動を必死に抑え、骨ばった腰を指が引き寄せる。肩に爪が食い込む。

「っ、……はあ……っあ」

ぐわん、と喉が上を向く。逸らす背中 hands を回す。上下だけではなく、前と後ろに腰が動く。徐々に奥に飲み込まれていく性器は凶暴さを増し硬くなる。

「う……くっ……！」

本能的に腰を打ちつけた。悲鳴のような高い声があがり、スレインの腰が逃げるように後ろへ傾く。

「ばか……っ、まだ、動くな……っ！……っあ！」

「いや……っ、ごめん、むり……」

細い腰を掴み、深く沈ませる。みし、と媚肉をこじ開ける感触。熱く濡れて蠢く腸壁に断続的に先端を打ち付け押し開く。

「あ、あ……っ！」

ぐり、と何かを強く擦った。びくんと身体が跳ね上がる。

「ッあ……！ア、ア……！」

背中が、電流が流れたように跳ねた。括約筋がぎゅう、と締め付け腰の揺らぎが大きくなる。奥へ奥へと誘う内壁を強く速く擦り上げる。

「ハア、ハア……ッ！」

背中にしがみつくと腕の力が強い。腰に巻きつく脚が弱い力で背中を蹴る。結合部分はしとどに濡れて、シーツに落ちて溜まりを作る体液は混ざり合ってどちらのものかわからない。

声が耳の奥に聞こえる。髪の毛の匂い。息の匂い。引き寄せる背の肌は汗で冷たく、繋がった場所は別の生き物みたいに熱く濡れて、境目が曖昧になる。

「ハア、あああつ！ い、……っ、あ、いな、ほ……っ！」

「……っ、スレ、イン……！」

声が遠のき、鼓動のリズムが同じになる。ぐちゃぐちゃでどこまでが僕なのかわからないくらいそこは熱くて――。

何かが光った。跳ねた鎖が光を連鎖させる様に、夏の波がきらめいた。

「う……ああ！ アアッ――！」

脳裏を刹那通り過ぎる、鳥の影と波と風。

すぐそこに、鬱血の散る首筋がある。少し丸まった背中。その右手は、自身を守るかのように左

肩に置かれている。伊奈帆はその手の爪の形や、節くれだった関節をぼうつと見ていた。

照明を落とした室内で、月明かりに浮かび上がる肌は青白い。頸椎の七つ目。そのあたりから肩甲骨の間にかけて、皮膚の引き攣りが無数にある。

この傷について、聞いたことはない。上半身の至る所についたこの傷痕を初めて見たのは数年前だ。知ったのは更に前。触れたのは、ついさっき。薄い皮膚と体温があり、恐る恐るそこに触れるとスレインはくすぐったそうに喉で笑った。

誇れる傷痕ばかりじゃない、か。

せめて、消えてくれればいいのに。ヒトの身体はそうもいかない。失われた左目が再生されないのと同じこと。

伊奈帆は自身の左目を開閉。次に右目。もう一度繰り返す。どちらも同じくらい見える。でも、片方は義眼だ。それでも、正常に作用する。僕の身体の一部になつて。

「……傷は、ただの傷だよ。スレイン」

枕に深く沈んだ寝顔は見えない。後ろ頭の跳ねた髪を指で摘む。耳の後ろに流して、乱れた髪に指を通す。少し汗ばんだ細い髪が星の明かりを照り返す。

……僕のせいだろうな。消えない傷の幾つかは。今、どんな顔で眠っているんだろう。

こちらを向いた右手の四指に、伊奈帆は左手を重ねた。冷たいけれど人肌の手。骨の感触は思ったよりも大きくて少し安心した。

二〇二四年八月十一日

「どれにする？」

「どれと言われてもな……」

伊奈帆の質問に首を捻るスレイン。火曜日昼下がりの大型ショッピングモール。季節の衣料品売り場の一角。今は夏。眼前には花火や海の立て看板と浮かれたポーズのマネキン。エリアを分割して水着と浴衣が男女それぞれ大量に陳列されている。細かい違いはあるけれど、全部同じに見えるのだ。

スレインは、手近のハンガーを一つ手に取る。

「これでいいだろ」

ペラリとした生地、上下セットの日本の衣服。丈は腕が肘まで、脚は膝くらいだろうか。どことなく極秘施設の囚人服を思い出させるけれど身軽で涼しそう。

「いや、君はこっち」

伊奈帆がずい、と別のハンガーを押し付けた。濃紺の布地は折りたたまれた状態で、ピンチのついたハンガーで固定されている。形状が異なるが、これも「ユカタ」というやつか？

スレインは周囲を見渡す。一体のマネキンが目に残った。

「これは、女性用じゃないのか？」

華やかな花柄の布を纏った女性のマネキンを凝視。一枚の布を、前で重ねて太いベルトでぐるぐる巻きに。同じ作りに見える。

「これ、男性用だよ」

「でも、こっちと形が違うじゃないか」

「それは甚平」

二人は、二日後に開催される花火大会のために浴衣を選んでいた。伊奈帆の強い要望で。この男、無表情朴念仁の見た目に反してイベントごとが好きなんだ。ハロウィン、クリスマス、お正月にバレンタイン……。

「ちゃんと男性用だから。そっちが正式な浴衣。僕はこっちにするけど」

言って伊奈帆はグレーの甚平を手取る。

「どうしてお前はこれにしない？」

「自転車漕ぐからだよね」

アルコール摂取のため、移動は公共交通機関に決めた。とは言うものの、山の麓のバス停は通常の運行一日三本。はつきり言って超が四つつくくらいの田舎である。しかし調べると、花火大会は臨時で本数が増えるらしいと町役場のホームページにお知らせがあった。

そのバス停は、歩いて四十五分くらい。下りの場合。

「山道、帰りはきついぞ。僕もそれにして、交代で漕いだ方がいいんじゃないか？」

「いや、いい。脚力には自信がある」

伊奈帆は自身のふくらはぎを示す。確かに、着痩せするタイプかもしれない。

「それに、そういうシチュエーションに憧れがある」

「そういうシチュエーション？」

伊奈帆は力強く、しっかと頷く。

「自転車の二人乗り。専門用語ではニケツ」

「ニケツ？」

「なんの隠語？」と思いつつ、スレインは納屋の自転車でその状況を想像する。あまり、スマート

とかスタイリッシュ、ロマンチックと言いたい。

「とは言いつつ、ギア無しのママチャリだからね。あの坂は、帰りは押すことになりそう」
「そうだろうな」

夜更けに自転車を押して汗だくになり山道を上る様子が浮かび、鼻から息が漏れる。

スレインは伊奈帆の選んだ浴衣を胸の高さに上げた。紺一色かと思われたが、よく見ると、黒や白の細かな模様が入っている。リーズナブルな値段の割に、芸が細部まで行き届いている。

「どうしてそこまで、僕にこれを着せたいんだ？」

「似合うと思うし……」

伊奈帆は軽く首を傾げる。これはまた、面倒なことを言い出すだろうと予感があった。

何を言い出すんだろう。

「着付け、やりたい」

「着付け？」

確かに、周囲のマネキンがこのシンプル極まりない布をどうやって身体にフィットさせているかは謎だ。

「帰ったら練習させて」

「？わかった」

フォーマルなスーツやドレスと同じように、複雑な行程があるのだろう。と、その時スレインは気安く頷いた。

「うっ……、ぐっ……!!」

シュル、シュ、いう衣擦れの音が忌々しい。

「ま、……って！ちよ、……苦し……!!」

ギリギリギリ。こいつ、聞いているか？食い込むような勢いで体を締め上げられ、息もともに吸えない。スレインは呻き声の最中に思いつき息を吸い、肩越しに振り向いた。

「おい、きつい！」

伊奈帆は一瞥を返し、紐を握る手を一度止める。手を止めたからといって、腹部の圧はゆるんだりはしない。

「後で緩むから、最初はキツめに締めとかないと」

帰宅後。畳の部屋で、その着付けというのに取り掛かった。一緒に購入した紐が不思議で不穏な

気配を若干感じたが、まさかそれらを身体に巻いて、思いもよらぬ力で締め上げられるとは思わなかった。

脳裏に、かつて経験したあらゆる拷問が走馬灯のように浮かぶ。どれもそれなりに痛かったけど、これも負けず劣らずじゃないか？

「あ、っ……………く！なあ、もっと優しくしてくれないか？」

「!!……………オーケー」

返事と真逆に、ぎゅううううう、と一層強く締め上げられる。スレインはくぐもった悲鳴をあげつつ腰を折る。

「……………っ、おい、聞いてたか!? もっと……………っ！優しく！」

「よし」

「何がよしだ!？」

「あ。……………えっと、巻き加減」

絶対違う。

「……………楽しんでないか？ お前」

「……………いや、別に」

間があったな。ああもう、どうして僕は最初に選んだあっちのやつにしなかったんだ……。さっき袋から出して着方を見たけど、ウエストはゴムだしトップスは縫い込まれている紐で簡単に結ぶだけで楽そうだった。

「くそ……、お前もこの苦しみを味わえ……!」

「次の機会にね。はい、次はこっちの紐」

「!?!? まだあるのか!?!」

さらに出てくる紐。さっきのよりも太い。紐というより長細い布という感じだ。

「女の人に比べると、少ない方だよ」

「うう……。ぐえっ!」

観念して項垂れる。さっきの紐の上に重ねて後ろでクロスし、ぐいい、と締められカエルみたいな声が出た。もっと可愛い声出せない? と伊奈帆が呆れた声で言ったので、後ろ足に脛を蹴る。力が入らず、いて、と小さな呟きだけでダメージは入らない。くそ。

キュ、キュ、と高い音で布が鳴く。いい布だな、シルクだろうか、とぼうっと考えていると、さっきの伊奈帆の言葉が引っかった。

女の人に比べると、って……。

「……女の人の着付けをした事があるのか？」

伊奈帆が一瞬手を止めた。こっちを見ているのがわかるけど、顔を見たくなくて畳の凹凸を目で辿る。

伊奈帆がキュ、と布を引いた。さっきまでより弱い力で。

「何を想像してるか知らないけれど、姉貴だよ」

「ああ。お姉さん」

その返答に、ほっとする自分がいた。

「僕もさ、……中一くらいまでかな。浴衣着て、ユキ姉と一緒に祭り行ったりしたんだ」

「へえ」

「お祭りっていうか、近所の縁日だけだね」

こいつも、これを着たんだな。やっぱり苦しくて、うえ、とかぐえ、とか言っただろうか。自分で着たなら、そんなこともないのかな。

「花火大会、初めてかも」

「ふうん」

少し意外だ。変わったやつだけど、割と普通の若者っぽいところがある。友人もいるのだから、

そういう青春っぽいことは一通り経験があると思っていた。

「僕も、花火は初めて見る。イルミネーションなら、いろんな国で見たけれど」

「そうなんだ」

ぽん、と背中に手が乗った。

「はい、完成。見てみなよ」

伊奈帆が姿見の前にスタスタ歩く。スレインも近寄って鏡面を覗いた。

「あ、同じだ」

マネキンと同じ着方。きっちり着付けた直線的な衣服は、露出は首と手首と足だけだが、洋服より涼しく感じる。初めて着るが、似合っていないこともない。

「ね？ 僕の言った通り。こっちのがいいでしょ」

伊奈帆は満足そうに、視線を上下にゆっくりと往復させた。

「そうかもしれない」

確かに、見た目でいえばこちらの方が似合っているような気がする。しかし……。

「でも、お腹のあたり、すごく窮屈なんだが」

「すぐに慣れるよ。せっかくだから、今日はそのまま過ごしたら？」

「本気か……？」

スレインは伊奈帆の言葉にギョツとして口を開く。伊奈帆はうん、と他人事のように頷いた。あ、実際他人事か。

「明日はそれ着て結構歩くし、ご飯も食べるよ」

「ああ、そうか」

そう言われると、このまま過ごすつもりになる。こういうのを、丸め込まれた、と言うんだろうな。

「家事はやつとくから、のんびりしなよ。寝転がると楽だよ。経験則として参考までに」

伊奈帆が縁側に足を進めつつ言った。スレインは自身の全身を上から下までしげしげ眺め。

「寝転がる？ これ、バラバラにならないか？」

と言った。伊奈帆はくすりと小さく笑う。彼は地面に下りて、サンダルを足に引っ掛けていた。

「そんなやわな着付けはしてない。動くほど身体に馴染むよ」

「そういうもんか？」

伊奈帆が中庭を歩き過ぎ、家の裏に向かった。洗濯物を取り込みに行くのだろう。スレインは縁側に腰掛け、言われた通りに仰向けになってみる。木の感触が布越しに伝わる。腰のあたりがカー

ブになって、食い込む紐が少し緩んだ。確かに、寝転がると楽だし、気持ちがすうつとなった。

翌日。

「よし、完成」

翌日の昼下がり。昨日と同じ畳の部屋で、ぼん、と伊奈帆が背中に軽く手を乗せた。

「どう？ スレイン」

浴衣姿を鏡に映す。昨日は着せられた感じがあつたけれど、今日は少し馴染んだみたいだ。

「昨日より、苦しくない」

「でしょ」

伊奈帆も既に着替えていて、甚平姿が涼しげだ。グレーの目の細かいストライプ柄で、丈は肘と膝下まで。

「お前……。若く見えるな。それ」

「そ？」

「ああ。……若いいうか」

若いというか、学生のように見える。並んで歩いてどういう関係に見えるだろう……、とスレインは若干心配になったが、深く考えるのはやめにする。店に来るお客さんには実年齢を知られていいことだし、問題はない。

「？ じゃあ、出掛けよう」

玄関先には、既に履物が並べてある。それを見て、スレインは首を傾げた。

「あれ？ お前、ゲタじゃないのか？」

黒塗りの下駄の隣にあるのはスポーツ用のサンダル。伊奈帆はそちらに足を入れた。

「自転車漕ぐから」

「へ？ ミスマッチじゃないか？」

「いや。浴衣とか甚平はカジュアルウェアだから。サンダル履きはポピュラーだよ」

甚平にスポーツサンダルを身につけナイロンのボディバッグを斜め掛けした伊奈帆を、スレインは上から下まで眺めてみる。

童顔なのは知っていたが、この出で立ちだとハイスクールの学生にしか見えない。十五とか、十六とか……。

「なんか、若いな」

「……さっきから少し引っかかるけど、まあいいや」

伊奈帆が玄関を開いた。夏の熱気が中に吹き込む。素足に下駄は、思いの外涼感があり心地よい。伊奈帆が、玄関脇に置いていた自転車ロックを外し跨った。

「さあ、行こう。後ろに乗って」

スレインは荷台の部分にまず手を置いて、少しの間考えた後、横座りでブレーキ部分に踵を乗せる。進行方向に対して横向きになるが、衣服の構造上脚が開かないので仕方がない。

「発進」

「おわっ！」

伊奈帆の足が地面を蹴った。想像よりも素早いスタートダッシュは悪路により、上下左右に激しく揺れる。

「伊奈帆！落ちる！」

「大丈夫、大丈夫。しっかり掴まって」

ぎゅ、と伊奈帆の腰に腕を回してしがみつき、そのまま伊奈帆に背中に体重を預ける。坂道に差し掛かる前。なんとか振り落とされずに済んだが、手を離したら転げ落ちそうだ。

「うん、オッケー」

「何がだ!？」

「いや、……制限速度とか」

「絶対適当に言ってるだろひょへ！　いてっ!」

「舌嚙むよ。黙って僕に抱きついてて」

「~~~~~!!」

あの長い下り坂をこの調子で!?!　と思いつつ、スレインはありったけの力を腕に込めた。

「はい、到着」

ブレーキが甲高い音を立て、自転車は停止した。スレインはふう、と大きく息を吐き、伊奈帆を掴んでいた腕を離した。力を入れすぎて腕がだるい。ぎこちない動きで自転車から降り立つ。

「大丈夫?」

「うう……、お尻が痛い……」

「!!……………そう」

伊奈帆が自転車をバス停脇の茂みに駐車しながら生返事をした。バス停と言っても、車一台分の

畦道にボツンと標識があるだけ。屋根もなければベンチもない。時刻表には、本日の特別運行についてのでラミネートされた張り紙がある。五分後の便に間に合った。二人はバス停に並んで待つ。

「帰り、あの坂登るのか？」

「そのつもり」

だったけど、と言葉は続く。

「帰りは、歩いた方が早いし楽だね」

「だろうな」

自動車では何度となく往復した道だけれど、自転車は初めてだった。感想は、想像の斜めはるか上。宇宙空間での戦闘経験のある二人でも、オフロード走行のダイレクトな振動と上下のミキシングに辟易していた。

しばらく、疲れもあつて無言で空を眺めていた。蝉の鳴き声が重なる夕と夜の間の空は、刻一刻と移り変わる色彩が美しく、気がつけばバスの走行音が聞こえていた。

「バスが来たね」

「小さいな」

「マイクロバスだね。こんなもんだよ」

丸みを帯びた、おもちゃのようなピンクのバスはゆっくりと停車した。乗降口が開く。伊奈帆が先にステップを上がった。

「あ、乗れる？」

伸ばされた手を掴みそうになり、慌てて引っ込める。運転手と目が合う。微笑ましい表情であつたかーい眼差しを送られてしまった。

「こら、恥ずかしいからやめろ」

「そう？」

あつさり手を引っ込めた伊奈帆の背中に続いて上り、券を取る。そこで高い声が聞こえた。

「あ、なおくんさんだ！」

乗り込むと、バスの後部座席で、常連の女子中学生が手を振っていた。紺地に朝顔柄の浴衣姿で、友だち二人に挟まれて座っている。挨拶を返すため、伊奈帆とスレインは後ろの方へ進んだ。

「こんばんは」

「わあ、アメさん浴衣ステキ！ 似合ってますよ」

「そうですか？ ありがとうございます」

少女らから、一つ空けた前の座席に並んで座る。車内は空いていて、乗客は数人だった。通路側

に座った伊奈帆に少女は聞いた。

「お店からあのバス停まで、どうやって来たの？」

「自転車です」

ええつ、と三人がユニゾンで叫んだ。空いているとはいえ、他の乗客が一斉にこちらを見たので伊奈帆はしー、と人差し指を口に当てた。

「あ、ゴメンナサイ」

「かなりありますよね？ キヨリ」

ラメ入りピンクの浴衣の少女が目を大きくして聞く。

「まあ。駐車場が混みそうだし、僕たちお酒も飲むから」

「でも、帰りはだって、上りでしょ？」

「限界までは漕ぎますけど、やっぱり押すしかないかな」

白地に紫陽花柄の浴衣の少女が授業のように片手を上げた。

「帰り、うちのお父さんに頼んであげます。軽トラで行ってるから」

「え、でも……」

そうしようそうしよう、と少女たちは顔を見合わせ盛り上がる。

「あたしたちのついでだから。ただ、なおくんとアメさんも、自転車と一緒に荷台ですけど」

「願ってもないことですが、いいのですか？」

紫陽花柄の少女がふふっと笑みを漏らした。

「だって、そうしたら帰りが一緒なもの」

どういう意味だろう、とスレインは考えるが、伊奈帆が先に返答した。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「わあ！」

「みんな羨ましがるね」

「「ねー」」

「じゃあ、花火の後で！」

バイバイイ、と元気に手を振る少女三人に伊奈帆とスレインは手を振り返す。バスを降り、軽トラを出してくれるという少女の父親と対面した。日に焼けたひょうつと背の高い男性で、店に何度か来たことがあるのをスレインが覚えていた。すぐに話がまとまり、花火の後に祭り会場のバス停

が集合場所だ。

少女たちを見送った後、二人も出店へ向かって歩き出す。

「女子の勢いはいつの時代もすごいね」

「何、年寄りじみたこと言ってるんだか。可愛らしいじゃないか」

「前から思ってたけど、君、女子の扱いうまいよね」

「そうかな。……お前だって、ご婦人と世間話で盛り上がるじゃないか。イドバタカイギ？」

「ま、弟の性だね」

「なるほどな」

夜店の明かりと提灯で賑やかな会場は、既に混み合っていた。行き交う浴衣姿やラフな私服の学生達、ファミリィ、それにカップルたち。

「さてと。まず、何にする？」

「ビールが飲みたいな」

「だよね」

「あ、界塚さん！」

通りがかった本部テントから小走りにやってきたのは町長。額には白地に紺の豆絞り。背中に大きく「祭」と書かれた青い布地のはつぴを、半袖のスーツの上に羽織っている。

「こんばんは」

「来とったんですね。そちらが？」

「ス……、レイン。この方、町長さん。ほら、改装や宣伝を口利きしてくれた」

「レイン・アンダーソンです。お世話になってます」

スレインが会釈をすると、町長も礼を返し、横目で伊奈帆をちらりと見た。

「どうも。お店は順調だそうですね。大評判ですよ」

「おかげさまで」

「なかなか行けずに申し訳ない。祭りがあつたよって、ちょいと忙しかつたんです」

ペコリと頭を下げた笑い、彼は両手を広げて周囲を示した。

「お祭りどう？ 楽しんでる？」

「僕ら、こういうお祭り初めてで」

「楽しいです」

「そりゃ良かったです。伝統行事なんでね。山車も出るで、見てってください」

「だし？」

「お神輿のことだよ。飾りのついた担ぎ物」

「へえ」

町長の指さす方に、鮮やかに赤く連なる提灯が見える。大きな神輿はライトアップされ、荘厳な感じで出番を静かに待っていた。

「都会に比べれば何もないところだけど。この町に住んでみてどう？」

「快適です」

「界塚さんは相変わらずクールや。レインさんは？ どう？」

「みなさん、いい方ばかりで……。こんな言い方変かもしれませんが、安心します」

「そう。……良かった」

深く頷き、彼は右手を差し出した。まず伊奈帆が、次にスレインが握手に応える。

「お祭り、楽しんで。あ、そうそう。とっておきの穴場があるんだ。花火の時間はそこがいいよ」
彼は人差し指を海と反対方向へ向けた。

「ねえねえ、なおくんさんとアメさん、やつぱりそうなのかな？」

少女三人は、屋台を回っていた。歩きながら、食べながらの喋り通し。話題の中心は先ほど別れた喫茶海猫の二人について。

「そう、って？」

ピンクラメの浴衣の少女がサイドテールを揺らし問い返す。

「だーかーらー、付き合ってるのかなー、ってこと！」

朝顔の浴衣の少女はりんご飴を指揮棒のように上下する。声が大きく、すれ違い様にカップルがくすりと笑った。

「ええ!？」

「絶対そうでしょ。デートそのものだもん」

「大人の男の人が、ただの友だちってだけで、わざわざ浴衣着てお祭り行く？」

「お祭りで、おしゃれして女の人を誘うのかも？」

「いや、ない」

「なんで言い切れるわけ？」

「それなら、私たちと帰らないよ」

「なるほど」

「それに、村の女の人、みんなアプローチしてるよ。相手にされないって嘆いてるって、おねーちゃん言ってた」

「あんなイケメン、村にいないもんねえ」

「かつこよくてスマートで、お料理上手で優しくて……。何歳だっけ？」

「おばーちゃんの話では、二人とも二十代後半。二十六と二十七だったはず」

「それで、結婚してないんだもんねー」

田舎では、結婚年齢の平均値が低い。二〇代後半なら、適齢期としては少し遅いというのが少女たちの感覚だ。

「そもそもさ、一緒に暮らしてて、一緒にお店やってるんだし。付き合ってるというか……」

「もう、夫婦だよね」

「ふっ……ふうふ……!!」

「でさ、どっちがどっちだと思う？」

「えっと、それってつまり……」

かあつ、と顔が赤くなる。

「私はねー、やっぱりアメさんが旦那さんなんじゃないかなって。かっこいいし、スマートだし、年上だし、金髪で青い目で、王子様そのものじゃん！ なおくんさんは童顔だし、カワイイ系だもん。今日なんか、高校生くらいに見えたよ？」

「甘いわね」

紫陽花柄の浴衣を着た、ショートボブの少女がクールな声で言った。

「え？」

「なにに？ あんた逆推し？」

「別に推してるとかじゃないけど。あんたたち、二人の足元を見た？」

「足元？」

「下駄でしょ？ スニーカーとかじゃあなかったような……」

「観察眼が足りないわね。アメさんは下駄だったけど、なおくんさんはサンダル履きよ」

「サンダル？」

「ほら、川遊びとかで使うスポーツサンダル」

「ああ、あれね。……それで？」

「自転車であんなに言うってたじゃない」

「うん……。あっ！」

「気づいた？」

「え？ わかんない。なに？」

きらり、と少女の切れ目が鋭くなる。

「浴衣と下駄で自転車は漕げないわ」

ぽん、とりんご飴の手が合点を示す。

「二人乗りってことね。なおくんさんが運転して……」

「そっか！……で？」

「だからね、浴衣で自転車の後ろに乗るなら、こう……こう、なるでしょ？」

「あゝ、なるほど！」

「ね？ この構図、男子の憧れよね。まあ女子も。そうすると、なおくんさんが旦那様なんじゃないかな

かしら」

「へー！」

「なおくんさんが着付けもしてあげたんじゃない？ アメさん北欧出身らしいもの」

「きゃー」

「すごいわね、あんた」

「ふふん」

「そうなんだ……」

「北欧出身って、どこ情報？」

「おばあちゃん」

「おばあちゃんもすごいねえ」

「いつ頃日本に来たんだろう？ 転校とかかな？」

「日本語上手だもんね。住んで長そう」

「どういう関係なんだろう？ 同級生じゃないよね？」

「部活の先輩後輩とか？」

「何部？」

「うーん……」

神輿の太鼓が聞こえる中、少女三人は夜空を見上げ考える。

「野球とかサッカーって感じじゃないよね。文系かな？」

「吹奏楽？」

「放送部……はないか」

「科学部は？」

「どちらかといえば、天文部っぽくない？」

「意外なところで、囲碁将棋部」

「なおくんさん強そう」

ツインテールがびよんと跳ねる。

「あ。料理部とか！」

「ああ。だからカフェ？」

「それ、合流したら聞いてみようよ」

最初の花火がドオンと上がった。

「カンパイ」

「ああ、カンパイ」

プラスチックのビールコップは、液面がぼわんと揺れるだけで音は鳴らない。とりあえずこぼれ

ないように数口飲んで歩き出す。

「いっぱい取ったね」

伊奈帆は自身の左手を持ち上げる。パンパンのビニール袋には、市販の箱菓子、レトロなおもちやが溢れんばかりになっていた。

「つい熱が入った」

「流石に上手いね。いい腕してる」

序盤で射的の屋台を発見した二人は、軽い気持ちで勝負を始めた。当然的に命中するが、景品がなかなか倒れない。おそらく重りか接着だろうと伊奈帆が分析、勝負は共闘体制へ。角度や距離、間隙を調整。完全にゾーンに入った二人は、景品を取って取って取りまくった。気づいた頃には人だかりが出来、十個目の景品を落とした時、その場は拍手と歓声に包まれたのだった。

「半分くらいは、タダでもらったような気がするけど」

スレインの両手の指には、りんご飴、いちご飴、みかん飴、綿菓子にフランクフルト、トルネードポテトに焼きとうもろこしが忍者の構える苦無さながら握られている。伊奈帆が肘に下げたビニール袋も、左は缶のアルコール飲料がみつちりで、右は焼きそば、お好み焼き、たこ焼きの三段重ね。ソースの香ばしい匂いが二人の半径一メートルに充満していた。買い求めたものもあるが、

多くは射的に大喜びした観客からの厚意である。

「お返ししないといけないかな」

苦笑するスレインに、伊奈帆は肩をすくめて笑う。

「お祭りだし、いいんじゃない？」

うみねこのにいちちゃん、と何人にも声を掛けられた。心ばかりのお返しは、店で何か企画をすれば良いだろう。二人の店は存外有名らしかった。

「さっき教えてもらった場所で見ようか、花火」

「そうだな」

「たまや、って何だ？」

花火が上がるたびの群衆の掛け声をスレインが聞いた。

「屋号だよ」

伊奈帆は即座にそう答える。スレインは首を傾げる。

「ヤゴウ？」

「花火屋さんの名前。玉屋と鍵屋が二大勢力」

「へえ」

スレインは頷くが、はてな、と再び首を傾けた。

「どうして、そのカギヤ？の方は聞こえない？」

「掛け声としては、言いやすい方が残ったらしい。現実には逆だけどね」

「？」

「鍵屋は今でも続いているけど、玉屋は廃業しているそうだよ」

「へえ」

会話は途切れ、三度ほどその掛け声が聞こえた。スレインが缶を傾け、一息ついて口を開く。

「いつも思うんだがな。お前、どうしてそんなこと知ってるんだ？」

「常識でしょ」

「そうなのか？」

伊奈帆がククツと喉で笑う。彼も缶を傾けた。缶のレモンのイラストが、花火の色を照り返した。

「冗談だよ。調べたから、知ってるだけ」

「ふうん」

「昨日寝る前に」

「昨日？」

スレインの声に驚きの色が混じる。

「もしかして、いつもそうなのか？」

てつきり、なんでもかんでも知っていると思い込んでいたけれど。伊奈帆はりんど館をシャリ、と齧る。

「話のタネにね。君の質問は予想しやすい」

「何？」

「……別に」

かわいいところがあるな、と思ったが、口に出すのはやめにする。その代わり、花火に向けてこ
う叫ぶ。

「たーまやー」

「かーぎやー」

間髪入れず隣で声。二人分の笑い声は、花火の音に紛れて消えた。

「あ、来た！」

おい、と手を振る三人組に伊奈帆とスレインは駆け寄った。少女たちの手首に重ね付けされたケミカルライトが、光跡の弧を量産している。

「ごめんなさい。お待たせしてしまいましたか」

「大丈夫です。お父さん、今車取りに行つてるところです」

「そうですか」

ツインテールの少女が大きく首を傾げる。

「お二人、どこにいたんですか？ 全然すれ違わないから」

「ああ。えっと、あれなんだっけ、い……なくん」

「屋台回って、その後は公民館にいたんですよ。僕らの他にも、家族連れが何組か」

公民館があゝ！と三人の声が重なった。

「穴場ですね。でも、他の家であまり見えませんか？」

「屋根にいたんです。僕ら」

「屋根!？」

「あ、それ言っいいのかな。ごめん、内緒にして」

「屋根に上ったの!？」

「どうやって!？」

「え、裸足で……」

「木から伝ってね」

「え？ アメさんその格好で？」

「ええ。少し汚れましたかね？」

「すご……」

「やっぱり運動部？」

「ボルダリング部？」

「忍者同好会？」

三人は顔を見合わせ、何やらごによごによしていたが、朝顔柄の浴衣の少女が一步前に進み出た。
セミロングの黒髪がちゃんと揺れる。

「あの、お二人に聞きたいことが！」

「え？ 何です？」

少女は胸の前で両手を合わせ、すう、はあ、と深呼吸した。緊張した面持ちで肩をブルブル震わせている。

「あの、大丈夫ですか？」

スレインが聞くと、少女はかあつと頬を赤くして、後ろの少女らを振り返った。うんうん、と握り拳で頷く二人に少女も強い感じで頷き返し、キリつとした表情で前を見る。

「あ、えつと……、あの、その！」

「はい」

「どうぞ」

「お二人とも、何部でしたか!？」

「へ？」

スレインがクエスチョンマークを頭上に乱舞させつつ伊奈帆を見た。伊奈帆は意味が分かったので少女に詳しく聞いてやる。

「部活ってこと？」

「はい！」

伊奈帆はその場で、スレインにクラブ活動について簡単にレクチャーする。なぜか少女たちから

拍手が起こった。

「それで、君、何かやってた？」

「いいえ」

「だよ。僕も。クラブ活動してたことないな」

「えゝゝゝ！」

少女らのユニゾンは相変わらず完璧である。伊奈帆はくす、と笑いが漏れた。

「珍しい？」

少女たちはうんうんと同じタイミングで何度も頷く。

「うちの学校では、部活は絶対だから」

「文芸部とか手芸部は、ほとんど帰宅部だけだね」。

「へえ。みなさんは、何部なんですか？」

スレインが聞いた。学生三人は気をつけの姿勢になって一人ずつ口を開く。

「あたしはテニス部」

「私は吹奏楽」

「新聞部です」

「へえ。みんな違うんだ？ それなのに仲良いんだね」

伊奈帆の言葉に、三人は顔を見合わせふふっと笑った。

「あたしたち、幼馴染だから」

「産まれた病院も同じだし。赤ちゃんの時からいっしょなの」

「病院も学校も役場も、一つしかないからねえ」

「役場はふつう一つでしょ？」

「あ、そっか」

「それで、なおくんさんとアメさんは？ どこでお知り合いに？」

新聞部の少女がきりつとした表情で聞いた。伊奈帆とスレインは互いの顔をまじまじ見つめる。

「お知り合いに……」

「海の上かな……」

「えっ、船？ フェリーとか？ 修学旅行？」

「うーん。ま、そんなとこ。最初は喧嘩して」

「喧嘩……。まあ、今となってはそうも言えるか」

「あれから十年か。こんな長い付き合いになるとは、思ってたね」

「お互いにな。こういうの、クサレエンって言うんだろう？」

きゃあ、と黄色い声が上がった。

「十年だって」

「高校生の時からなんですわね！」

「まあ、そうだね」

「大学とか、お仕事は？」

「……同じ職場でちよくちよく顔を合わせてただけど。タイミングがあって、退職して一緒にお店をすることにしたんだ」

へえ、と言って、少女たちは揃って首を同じ方向に傾けた。

「でも、どうしてこんなド田舎に」

「ドイナカ……」

スレインが横目で伊奈帆を見る。伊奈帆がそれに応えるように一瞬視線を送り、口を開く。

「余生はのんびりしたくて」

「ふえ？ ヨセイ？」

「ね？ ス……、アメさん」

「ふふっ。はい」

「いいところだね。長閑で、みんな優しくて」

うん。本当に、とスレインが伊奈帆の言葉尻に続ける。伊奈帆は少女らに体を向けた。

「僕ら、邪魔じゃない？ 迷惑かけていないかな」

「トンデモナイ！」

「大好きです！」

「ウミネコ行くようになって、おばあちゃんも元気になって！」

「ありがとう！」

「みんな喜んでます！」

重なる声が大きくなり、詰め寄る少女らに二人はぱちくり瞬き顔を見合わせた。まん丸い目が三日月みたいな弧に変わる。

「そうなんだ。ありがとう」

「ありがとうございます」

ププー、というクラクションとともに現れたのは軽トラック。

「何大騒ぎしとんだ？」

「あ、お父さん」

運転席から肘と顔を出したのは、新聞部の少女の父だ。啞え煙草の火が橙に点滅している。

「お待たせ。自転車は？」

「五つ先のバス停です。お世話になります」

「こっちこそ。娘たちが世話になって」

少女の父はエンジンを止め、運転席から降り立った。

「祭りでは大変やったやろ？ 若い人、珍しいから」

「いいえ。色々良くしていただいて」

「みんな嬉しいんよ。村にあんな洒落た店無いでな」

ふう、と彼は煙草の煙を吐き出した。そして伊奈帆とスレインに笑いかける

「偏見とか、そんなんにせんでええよ。時代遅れなんやよな」

「偏見？」

「夫婦だろ？ 都会から来た若夫婦がカフェー開いとるってみんな言うとる。一部の頭の固い連中はぶつくさ言いよるけど、ほとんどのモンは味方や。あんた達、礼儀正しいし、ちゃんとしてるか
ら」

「夫婦って……」

顔を見合わせ、どぎまぎと俯く二人に少女らがキヤー、と黄色い声を上げた。ははっと豪快な笑い声。

「ははっ、まだ新婚か？ 初心だねえ」

男性は笑いながら荷台の方へ回り、ロックを外して後ろあおりをパタンと下ろす。

「ほら、乗んな。おい、お前らも後ろな」

「りょ！ でもこれ、どうやって登れば……？」

「僕が引つ張り上げるよ。君は下から」

「ああ」

伊奈帆が荷台に登る。少女らをスレインが下から支え、伊奈帆が手を引き、荷台の上に乗せてやる。きやあきやあはしゃぐ少女らを引き上げ、最後にスレインに向けて伊奈帆の腕が自然と伸びた。

「はい。君も」

その手を、スレインは少し躊躇い握る。

「よっ……、と」

乗り上げ、歩くとガタ、ガタ、と荷台が左右に揺れる。荷台の長方形の長辺に少女たち三人、運

転席の後ろの短辺に伊奈帆たちは腰を下ろした。

少女の父はバタ板を戻して運転席に乗り込み、運転席から身を乗り出した。

「全員乗ったな？」

発進し、車体が揺れる。

田舎道を行く軽トラの荷台で夜空を見上げる。少女らの笑い声と夏風の音、カエルの鳴き声が走行音と重なった。

「ありがとうございました」

「お店、また来てくださいね」

「ハイ！」

「みんなで来ます！」

「バイバイ」

遠ざかる軽トラック。スレインは少女たちが見えなくなるまで手を振った。やがて気配は完全に消え、後に静寂が残った。

「……伊奈帆。お前、どうかしたか？」

「何のこと？」

「とぼけるな。帰り道、神妙な顔をして黙り込んで」

スレインは声を低くする。誤魔化したり、黙ったりしたら許してやらないと思ったが、伊奈帆は自然な感じで頷いた。

「ああ」

言葉が地面に落ちてるみたいに、伊奈帆は真下に俯いた。やがて彼は口を開く。

「もう、無いんだなって」

スレインは意味が分からず眉を寄せる。

「無い？ 何が？」

「あの子たち、学校の話してたでしょ？ 部活とか、夏休みの宿題や先生の悪口。補講や、模試や志望校」

「ああ」

「それ聞いてて思ったんだ。変わったんだな、って」

伊奈帆は、足元の小石を蹴った。コンコン、と地面を跳ねて夜の闇に消えていく。

「今の子達には、兵科教練も、軍事演習もないんだ」

伊奈帆の横顔。この男もこういう顔をするのか、とスレインは目を瞪る。伊奈帆は頭脳明晰で合理的で冷静で、ともすれば冷酷な一面もあるのだが、自分よりずっと純で普通感覚を持った青年だとスレインは知っている。それが今は、知らない大人の男のような、孤独の影が強い顔で地面を見ていた。

家の明かりは消えている。街灯などない。今この場所で、星の明かりが全てだった。星の光が伊奈帆の頬や、手や腕や、足の甲に青く淡い光を落とす。彼の爪先の、まだ蹴られていない小石にも。

「僕はさ」

ああ。星って、こんなに煩いのか。

「世界から遠ざかるつもりで、こんな場所まで逃げてきた。つもりだった」

「逃げたわけじゃないだろう。お前は」

伊奈帆はくつきり首を振る。

「いや。君がいたから、逃げた。逃げられた。逃げてしまおうと決断した。誤魔化したくない。それも僕の一部なんだ」

星明かりが彼の輪郭を曖昧にする。現実感が遠のいていく。

ここに、いるよな？ 声だけ残して消えたりしないな？

「だけど、さっきわかった」

こちらを向いたその顔を見て、スレインは心底ほっとした。今はもう、童顔で表情の薄い、見慣れた男の顔だった。

「僕が最初、君の居場所として選んだこの場所は。僕らのことを誰も知らない、世界の端っこだと思っていたこの場所は」

伊奈帆は顔を天へと向ける。星を映すその瞳に、スレインは目を奪われる。彼の瞳の光は、どんな星より、ずっとずっと綺麗に見えた。

「ちゃんと、世界と繋がってる」

スレインも空を仰ぐ。星。星。そして闇。月の欠片の光は淡く、火星の赤は、今は見えない。なんて遠くて、途方もない。

あそこにいたのだ。僕たちは。

「平和の祈りは、ここにもちゃんと届いている」

伊奈帆の声が、天から届いたように耳を打つ。平和の祈り。一人一人の祈りが結び合って、世界の形を緩やかに変えていく。同じ祈りで、願いで僕らは繋がっている。たとえ遠く離れていても。

二度と、人生が変わることがないとしても。平和な世界は、一人一人の心の中を故郷に、きつとどこまでも広がってゆく。

その一端に僕らもいる。

じゃり、と砂土の音。気づくと伊奈帆がすぐそこにいた。

「僕が考えていたのは、それだけ」

「……なあ、伊奈帆」

「なに？」

スレインは伊奈帆の手を握る。汗ばんで、少し冷えた彼の手は、戦いを知っている。僕の手も、そう。この手が知っているのは、奪うこと。壊すこと。たとえそれが、誰かを守るためだったとしても。血に塗れた手で触れ合えるのは、お互いだけだと心のどこかで思っていた。

だけど、今。

この手はまだ。何かにそっと触れること。何かを作り出すこともできると知った。

「僕は、この場所が好きだ」

探していたものは、ここにあった。

「うん。僕も」

瞬く星々の大気の底で、
僕らは額を寄せてそっと笑った。

あきがき

雨の断章アニメ化おめでとうありがとう!!

HGP 創英角ゴシック UB 20 pt 特大フォントで失礼します。なにはなくともまずはこれを言っておかないと、と思いました。いやーめでたい！言い続けるものですね……！夢のようです！……コホン。

改めまして、この本を手を取っていただきありがとうございます。

以前発行した「オーダーメイド」の続編、というよりは構成上没にせざるを得なかった幾つかの話の補完と加筆、という感じです。モブキャラがわんさか出てきてとっつきにくいかなとも思いましたが、二人ぼっちで生きていくのではなく、世界のどこかに居場所ができて、元気にやっていくくれたらいいなという個人的な願いを形にできたような気がします。モブレシーンは正直しんどすぎて「人の心がない!! こんなひどいの誰が書いたの!?! 私だ!!」と頭抱えながらの校正作業でした。自分で書いているんですがあまり何度も読み返したくない部分です。推しの耐久試験を定期

的に行うタイプのオタクですが、ちょっともう私が先に降参です。スレインは何があっても壊れた
りしないとわかりました。強すぎる。かけえ。

これを書いている時点でBS再放送が2期ど真ん中なので、なんとか複雑な感じですよ。スレ
インの当時の苦悩というか、抗えない運命みたいなものに頭を抱えつつ全然邂逅しない伊奈スレに
やきもきという……。最終回でようやく始まるカブって強いな、と左右の眉を非対称に歪ませて
唸ってしまいます。雨の断章で、ようやく二人がまともに(?)話す姿が見られると思うとウキウ
キします。はあー早く見たい。

次の本のあとがきでは、雨の断章の感想を詳細に、フェティシズム全開で綴りたいと思います。
ネックレスのチェーンの影と照り返しをスレインの鎖骨とうなじにちらちらさせたり、濡れた軍服
を男臭く脱ぎさって前髪から雫をばたばたさせる伊奈帆なんかをやってくれると信じています。
それでは、次の本でもお会いできますように。

イメーজソング「ロマンチシズム」Mrs.GREEN APPLE

奥付

発行 Scramble/鳴海

発行日 2025.1.13/ZERO の方舟 17

印刷所 (株) しまや出版様

Mail jjncg720@yahoo.co.jp

PixivID 955950

X @narumiblue

くるっふ @narumiblue

マシュマロ <https://marshmallow-qa.com/narumiblue>